

---

# 小説「ガウス」

長根兆半

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小説「ガウス」

### 【Nコード】

N3092F

### 【作者名】

長根兆半

### 【あらすじ】

川北伝一郎とテーマは共に背中に傷を持っていた。国籍、年の差、言葉の違い、生き様の違い過ぎ、こうした多くの相違さえも乗り越えて遭遇する男と女。それは互いに引き合うガウス（磁力の単位）の強さによるのだろうか？？

## 小説「ガウス」

### 一、「出会い」

乗ってきた最終の路面電車から下り立つとすぐ、目印のホテルは、電車通りと一方通行の入口の角に立っているのが見えた。

そそり立ってビルが並んでいるのだが、この時間になると静かなビルの谷間でしかなかった。

僅かにネオンが光っていいのは、ほとんどが、ナイトクラブだった。男は、その全てが、ストリップクラブであることを知っているの  
で、見向きもしない。

目的の店に行くには、地下道をくぐって行けばいいのだが、信号もなければ歩道らしきものもない。車道には車も走っていない。  
乗ってきた電車の、道に埋め込まれている線路を、横切った。

ホテルの前を通り、一方通行に沿って少し行き、左の路地に入った。  
そこは薄い街頭が申し訳程度にあるだけで、これといった目立つ看板はなかったが、気を付けて見ると、中から明かりのもれるドアがあった。

その入口のドアを透かして中を見ると、エントランスと言えば言える六畳位の空間は、改装中かという印象だった。

腕時計は、既に十一時を回っていた。

本当にカラオケ屋か、といった僅かな不安を払って、ドアを押すと、  
あんがい簡単に開いた。

絵画一枚花一本すらない殺風景な空間の右手に、僅かな明かりがみえ、明かりに従い螺旋階段を下りると、そこはミニ円形競技場のようになっていた。四角い店内の中に、一抱えはあるうか、石の柱が八本、壁際に沿って、店内に円を作るように立っている。

ミニバーがあり、広告入りのドリンクケースがある。

レストラン用の椅子とテーブルはあるが、セトアップはされていない。

柱の陰のテーブル席で、五人のホステスがたむろって居る。

どの女も胸を大きく開け、超ミニスカートだった。

その中でも、二人の女は、まるでファッション雑誌から抜け出たように容姿がいい。ブラジャーで形の整った大きな胸が、これ見よがしのキャミソールから、今にもこぼれそうにしている。

他の三人は、どこか世間ずれした特有の崩れを漂わせていた。

誰もこつちに来る者は居なかったが、後ろから、

「カラオケですか？」という男の声がした。

童顔の小男だが、どこかにクセを滲ませている。

頷いて案内された十畳位の薄暗い部屋には、旧式のカラオケセットがあり、大きめのソファアが、コの字に配置されていた。

「飲み物は・・・」と聞かれ

「ビールでいい」といつてから、お持ち帰りの女は居るのか、と聞いた。

「居ますが、最低一時間は遊んでからにしてください」

女だけ連れて行かれたんでは、こつちの商売が出来ないというような苦笑いを含んだ困った顔で、小男が言った。

どうやら、カラオケを一時間してくれれば、紹介するということらしい。

間もなく、やはりと思ったさっきの女が三人、ビールを持って、小男の後ろに付いて、入って来た。

全体が貧弱で、体の線も崩れている。

女の曲線を探したが、やっとミニスカートから伸びている素足だけだった。

言葉も、日本語は仕方がないが、英語も通じない様子だった。

「他の女は出来ないのか？」

「向こうの二人は、普通のホステスですから・・・」

「・・・女は止めた。勝手にカラオケやるから、ほっといてくれないよ」

小男は不機嫌に女を追いついてながら、部屋を出て行った。

選曲メニューから何曲かリザーブし、歌い終わって、残りのビールを飲み、次の選曲をしている時、ドアがノックされた。

ドアを開けると、そこに女と小男が立っていた。

「先ほどは申し遅れました、私リーです。この子どうです？」とリーは部屋の中へ入るようと、軽く女の背を押した。

もし、人間にも、磁石と同じにひきつける力、ガウスと言うものがあるとすれば、男と女以前に、異極の磁力を持っていたのかもしれない。

店の女ではないことが、すぐ分かった。

概ね、この女の女は、対人関係で苦勞していればともかく、思考力の足りないのが多い、趣味や芸術性も乏しい。

簡単に金が手に入ると言う感覚でしか、人を見ないからだろうか。

女は、白のダウンの中に、いくつかのレースが施された黒の短いキヤミソール、股上の浅いジーンパンとの間からは、くびれの引き締まった腰周り、形のいいヘソが覗いていた。

全体の曲線も、申し分ない。

無邪気そうで、世間知らずに見え、愛くるしい雰囲気を持ったこの女を、彼はお持ち帰りにした。

一夜の女は、見てくれで充分だった。

テーマ二十歳、個人売春婦。

ロシア語、ハンガリー語、少しの英語を操る事が出来ている。

身長百五十八センチ、この子は無理に、とも見える首の関節を鳴らす癖があるアルメニヤ人だった。

ミニスカートが思い切り似合いそうな、ジーンパンに包まれている長い足。

男にとって、女性の足はなぜ綺麗、股間を想像するからだ、誰か

が言ったが、決してそればかりではない美しい曲線が、そこにはあった。

全体が均整の整った小柄で、東欧の掘り深い容貌が漂う。

「車の中で、無理やりフェラさせるんだから、でも、ああいうの、スキ」

全裸になってテメアは、ベッドの中で伝一郎に体を預けていった。伝一郎がテメアの頭に手をやると

「今伸ばしている最中なの」テメアはそう言って、やや薄めの髪に手をやり、どこか子供じみたしぐさで、髪を束ねていた輪ゴムをはずした。

小作りの頭に整った顔、きらきらと光る瞳、バランスの取れた高い鼻、胸はやや大きめでありながら、左が右よりも大きい、大きいほうの乳首を愛撫すると、テメアは性感の強い悶え方をした。

男にとつて、女性の乳房とは、不思議なものだ。

母を連想するからなのか、自分にないからなのか、触っているだけで、安らぐものが有る。

人間が、母の思い出から、馥郁とした胸を求める気持ちがかかる。だから、レズビアンを理解できても、ホモ・セクシャルの物欲的な行為が分からないと、川北伝一郎五十五歳。自称画家は思っている身長百六十五センチ、中肉中背と見えるが、やはりせり出した腹は、隠しようがない。

俗に言うショーユ顔だが、髪、そのほかファッションには無頓着なところがあり、常にオールバックだ。

夏になると短く刈り上げ、冬近くになると、その髪は伸びたままにする。年に二・三度理髪店へ行くだけで、後は風呂場で、自分で髪を鋏で切ってしまう。

着る物は、ほぼ年中変わり映えはしない。

日本とは違う季節が、それを助けていた。

夏は地肌にワイシャツ、冬はそれに、ボディースーツとレインコ

トを着る。

中学から高校、そして大学時代も、野球のピッチャーをするくらいだったから、その手のひらは大きい方ながら、その手に余るテメアの乳房だった。

川北伝一郎が、馴染みとなったカラオケ屋に行けば、テメアを呼ぶのが、コースになった。

リーはテメアを川北伝一郎に売る事で、ピンはねをして、稼いでいる。

いや、他の客にも同じような事をしている。

初めの二・三回は、待たされる事があったが、その後は待たされる事はなくなり、テメアは伝一郎が来るのを待つようにさえなっていた。

彼が、火曜と金曜日の毎週二回は、必ず来ると判ったからでもあった。

二人の会話は、片言の英語だった。

こつした関係が、六週間ばかり続いた七月のある日

「これ、私の携帯・・・」とテメアが、直接呼んで、と言って番号をよこした。

どうやら、カラオケのリーをはずして遊ぶということらしい。

その後、二度カラオケに行ったが、リーは、テメアはもう来ないといった。

その言葉に伝一郎は、テメアの作戦通りになっている事を知った。家から、テメアに携帯を入れると、いつものように、テメアが夜遅くにやって来る様になっていた。

来れば、泊っていくのも当たり前になっていた。

「急がしそうでいいね。何か食べる？」伝一郎は何気を装って言った。

「食べて来たからいいよ。先にシャワー使ってもいい？」

「ああ・・・」と伝一郎は言つて、その間に、軽いサンドイッチを作った。

食べて来たと言いながらも、食べる子だと言つて知っているからだつた。テメアは洗いざらしの髪で、胸からタオルを巻いて出てくると、テーブルに着くなり、何のためらいも無く、食べ始めた。

「ジュースもあるよ」伝一郎はテメアに言つて、自分も座つた。

ワインを飲みながら、話があるけどいいかな。とテメアの顔を見た。「いいよ・・・なあに？」

「ん、テメア、綺麗だし、優しいから、俺好きなんだけど、金を払つて遊ぶんなら、他の子とも遊びたい」

一瞬テメアは、食べかけていたサンドイッチを見つめて、ストップモーションになった。

「・・・いや・・・」とテメアは、ジュースでサンドイッチを流しこんでいった。

「だつて、もう二カ月にもなるけど、女と客の関係のままじゃ、俺には選ぶ権利があると思うんだ」

「お金要らないから、私を捨てないで・・・」テメアはテーブルに視線を落として、はつきりと言つた。

「三十五も離れてるけど、いいのか？」伝一郎は言いながら立つて、キッチンの窓際へ行つた。

「・・・年、関係ないから・・・」テメアは伝一郎の背に言つた。そして

「明日、私の通つていた小学校を見に行かない？」

「いいけど、どうして？」

「ずっと遠い所にあるから、ドライブしよ」

「あ、そういうことが、いいよ、行こう」

## 翌日の遅い朝

白いご飯に生卵を落とし、醤油をかけ、白菜の漬物で食事をしている時に、いつの間にかお互いに相手を、愛称で呼んでいた。



軽く紅茶を済ますと二人は、表に停めてある、中古のメルセデスに向った。

伝一郎をデンと呼ぶようになり、テメアを、チーミンと呼び合うようになった、心の何かが一つ開いたような軽さを覚えた。

ギラツとした夏の太陽が、借家の庭の、木々の葉を萎えさせている。木陰に停めてあるメルセデスに乗ると、テメアはナビゲーターになった。

「デン、お金なくなったら、どうするの？」

「この車で、生活するさ」

「これで？」

「もう歳だから、思い残すこともないし、車でヨーロッパを回って、どこかで死ぬさ。死ぬまでは大変でも、死んじゃえば、どうしようもないしね」

「・・・デンが死んだら、私も死ぬ・・・」

「アハ、嬉しいけど、俺を殺人者にしないだよ」

「冗談だけだね、そうだ、キャラバン生活ってどう？」

「ハハ、名案だな」伝一郎はそれも冗談だと思って、軽く応じた。

「今度、パパと会ってくれない？」とテメアは唐突に言った。

伝一郎は、テメアがいきなり話の方向を変える事が、面白いと思った。

携帯の番号を言った時、ドライブをしたいと言い出した時、そして今度はパパに会ってくれという。

## 二、素性

「パパ・・・と、どうしてだい、第一、何処で出会ったって聞かれたら、なんて応えるんだ？」

「マックで、空手の話しがでて、声掛けられたって言うよ」

「カラテ・・・？」

「パパ、カラテの先生してるから、話のつじつまは合うと思う」

「カラテかあ、しばらくやってないなあ」

「え、カラテやるの？」

「野球も好きだったけど、昔は黒帯だった、でも、今は、もうだめだよ」

「あのね、パパ教室持つてるから、来ない？」

「へー、いいな、行つて見ようか？」

ハンガリーの首都ブダペストから、一時間も離れたあたりは、林と山が続き、うつそうとした緑の中に、かすかに森の冷氣さえ感じられた。

メイン道路から外れると、山裾に入つていった。

林の中に民家があり、舗装されていない黄色い道は埃っぽかったが、ひと目で、これと分かる大きな建物の前に出た。

「あ、ここよ、学校。嫌な学校だった。いじめられてばかりいた」  
二人は車から降りた。

「どうして？」

「ハンガリー人じゃないからだと思う」

「え、チーミン、ハンガリー人じゃないの？」

「ちがう・・・」

「国籍は何処なの？」

「アルメニア・・・」

「フーン、聞いた事あるなあ・・・確か、国籍を売ってる国、税金が一律で、安いつて国じゃなかったかなあ？」

「知らないけど、それ、リヒテンシュタインじゃないの」

「ん、聞いた話だけどね、なんでもユダヤ人が国籍を欲しがって、手に入れると彼らは全ての収入をそこへ送り、かなりの節税ができると言うことだったよ」

「税金が一律な分、金持ちにはいいけど、貧乏人にはきついつて、パパが言ってた」

「で、どうして今、ハンガリーなわけ？」

「私が五・六歳の頃、パパはママと私を連れて、こっちに來たんだ

って」

「いつごろ？」

「一九八九年だって言ってた」

「ああ、アルメニアは、旧ソ連で、ん、ロシアになると言う境目だ」

「知らない、そんなこと、どうでもいいのよ」

「ん、そうだよ、俺の目の前に居るチーミンは、チーミンだから、いいよ」

「私、結婚したいの・・・相手を探すために、こんな仕事してたの・・・」

「いっぱい、いるじゃないか」

「学校で嫌な思いしたから、ハンガリー人は嫌なの」

「今まで、誰もいなかったのかい？」

「一杯居たよ。でも、セックスするまでは優しいけど、終わると、話の続きが消えていた」

川北伝一郎は、こうしてテメアの父親と、会う事になった。

「チーミン、パパと会う前に見たいものがあるけど？」

「なあに、デン？」

「よく、事務所とか、会社って言うけど、どこにあるの、住まいはどこ？」

テメアはなぜか、沈黙してしまい、しばらく車の外を見ていた。

「ね、この近くに大きなスーパーが出来たの、だからそこへ行つて、買い物しようよ。駐車場なんか、競技場みたいに広いんだよ」

伝一郎は、チーミンは何か言にくい事があつて、話を振つたなと思つた。

川北伝一郎より、三歳若いユリ と名乗つたテメアのパパは、通訳をつれて待ち合わせの喫茶店にきていた。

大柄ながつしりした大男で、全体が毛深い、テメアはパパ似だなと思つた。

「はじめまして・・・」と伝一郎は挨拶した。

するとユリーは、立って挨拶を返した。

お互いが、生活状況などを話していても、飲み物を注文する気配が無いので、伝一郎はウェイターを呼んで、人数分のコーラをオーダーした。

それを当たり前のように飲むユリーを見て、伝一郎は嫌な気がした。四方山話の中で、案の定、何処で知り合ったかを聞いてきた。

無論テーマとの打ち合わせ通りに話は進み、カラテの話になった。

「私は、七・八人に囲まれても、決して負けない力がある」とユリーの話が通訳された。

伝一郎は一瞬、プロがそんな話をするかな、と思った。

「プロの空手家は、本当に強いですね、でも、その強さを、破壊の為に使うか、建設の為に使うかは、貴方の心しだいですね」と川北伝一郎は言った。

「パパ、ジューン・ブライドしたい」とテーマは、カラテの話ははどうでもいいから、とでも言いた気に言った。

「誰と？」

「デンと・・・」

ユリーは一瞬眉をひそめたが、反対の一言すら口には出さなかった。

「デン、早速書類そろえて、私も揃えるから、いい？」

「ああ・・・」

伝一郎は、何がなんだか分からないまま、押し切られた形で、東京から戸籍謄本と、日本の警視庁から無犯罪証明書を、在ハンガリー日本大使館を通じて取り揃えた。

二か月後、残暑がいまだに肌を刺していたが、さすがに町の並木の葉は色づき始めていた。

繁華街のオクトゴンにある、ハンガリーの結婚申請事務所に行った。すでに、テーマの両親はそこで、待っていた。

受付が済み、係りの机の前に四人が立った。

ファッション・マニキュアをした係りの女性は、度の強いメガネをかけ、柔らかな雰囲気を持っていたが、話し方は、どこまでも事務

的でしかなかった。

双方の書類に目を通し、簡単な事務手続きが行われ、一週間後に、この結婚が成立するかどうかの結論が、政府から出ると言い渡された。

一週間後、強い陽射しの中に、空気が秋の気配を運んでいた。

「川北伝一郎のほうに問題はないが、テメアの方に、未婚証明が不足している、戸籍上での証明をするように」と言い渡された。

二人は、その足で、町をぶらついた。

へそ出しルックのテメアが

「私、太陽がとっても好き」と排ガスの歩道から、輝く太陽を見上げた。

「太陽、いいね、ね、おなかすかないか？」

「ギロスたべよ？」テメアはいたずらっぽく振り向くと、伝一郎の腕を取って急ぎだした。

「な、なんだい、その、ギロスって？」と、引きずられながら伝一郎が聞いた。

目の前の信号が黄色になり、通行人はそこで止まっていた。

その人垣を抜け、テメアは彼を引っ張って、かまわず突っ切ってしまった。

こんな事を咎めだてする人は誰もいないが、信号を無視した快感をテメアは満面に浮かべ、伝一郎を揺さぶりながらはしゃいだ。

左右に軽食レストランの並ぶ通りの、中央は公園になっていた。

「この先に、世界でも有名なリスト音楽院があるの、知ってた？」

「フーン、知らない」

短い夏を惜しむように、どの店も日よけのテントを店先から突き出し、その下に椅子とテーブルが並んでいた。

ハンガリーの夏は、女性が美を競う季節でもあった。

美女に見惚れ、ドライバーが、追突事故を起こすという椿事がよく起こった。見れば確かに、着ている服より、露出した肌の面積がま

だ目立っていた。

四肢もあらわに、思い思いの格好で、テントの下のテーブルにたむろっていた。彼女らは、自分の彼氏の姿を見つけると、小走りに近づき、彼の首に腕を回し、左右の頬を交互に合わせ、キスをして、甘える。映画のようだ。

そうした通りの雰囲気の中で、テメアが川北伝一郎を見つめ、私も・・・と言う目をした。

オーケーと頷いた伝一郎から、テメアはいきなり小走りに去ると、止まり、振り向き、改めて走って行って、飛びついた。

こういう事をやりたくとも、出来る相手がいなかったのかと思うと、伝一郎は、楽しそうにはしゃぎまわるテメアと、手を取りあいながらも泣けて、にじむ涙が、笑いに隠れてこみ上げた。

テメアは、やにわに伝一郎の手を取って、店に入った。店内は閑散としていた。

そこでギロスとジュースを注文し、少しの間手持ち無沙汰になったが、自然話は、先日の結婚申請事務所へといった。

「今、ママが、ロシアから書類を取り寄せる手続きをしてるから、大丈夫」

「なんとなく、チーミンの生い立ちが解って来たよ」

「どんなふうに？」

「でも、これって、チーミンの責任じゃないよ」

「よく分からないけど・・・」

「君が誰なのか、分かったよ。亡命家族の娘って事じゃないかな？」

「私を捨てるの？」

「バカいうなよ、そんなこと、関係ないよ」

「ほんと・・・？」

「ああ、好きで付き合ってるんだ、未来を見てさ、何も結婚だけが人生じゃないだろ。チーミンが俺の前から消えない限り、俺は消えないよ、ま、死ねば別だが」

「なぜ、デンは五十五なわけ？」

「今まで、チーミンを待っていたのかもしれないし、チーミンは私の歳じゃなく、私という人間を待っていたのかもしれない」

「どうして？」

「それは、今の俺にも判らない。でも、答えは必ずあるはずだよ」

「あと二十年は生きてて欲しい・・・」

「年齢に関係なく、人は何時何処で死ぬか分からないさ」

「そうだけど・・・」

川北伝一郎は、テメアがどんな境遇の生活をしているか分かったが、なぜ三十五歳も違う俺に・・・と思うと、男冥利には違いがないが、何がそうさせているのかが、気になっていった。

単なる金目当てか、とも思えたが、テメアを使って金を狙っていたのは、家族の方だった。

「私が、どうやって金を作っているのか、家族は絶対に聞いてこない、でも金が欲しいと言う」

テメアにすれば、聞かれて言える事ではないにしても、聞かれない事が、やはり寂しく、嘘を言うしかないと思っている分、寂しさに輪がかかった。

川北伝一郎にとって、テメアのこの台詞は、彼女の家族が暗黙のうちに、テメアに売春を迫っているのではないのか、とさえ思えた。

「ねえ、チーミン、前にも聞いたけど、会社とか事務所って、何処にあるの？」

「デンには関係ないじゃない」とテメアは言っ、聞かれない寂しさを抱っ、いながら、いざ聞かれれば、やはり隠したかった。

「チーミンの事務所とは、何の関係もないけど、そのことを隠すという事は、俺に、私を信じるなって言ってるようなもんじゃないのか？」

「そうじゃないよ」

「じゃ、どうなの、チーミンと俺が会った時、どんな仕事をしていたか、そんな事気にもしないし、尊敬すらしてるんだ。世の中には、いろんな仕事がある、政治家もいれば、マフィヤもいる。偽善者も

いればホームレスだっているのが現実だよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「売春をしている我が子に親は、止める恥ずかしいと言っだろう。しかし、その先をこうしろ。と言える親は何人いるんだい。言える親がいても、所詮は子の心を無視した親の考えを押し付ける事になっってしまうんじゃないのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「売春は、ビジネスの基本だと思ってる」と伝一郎は言った。

「・・・・でも」

「ん、でもなんだよ、やはり」

「じゃ、デンはどうして、こうしろっていわないの？」

「ビジネスの基本が分かれば、自然に、もつと楽しい金の稼ぎ方が分かり、黙っていても、そっちに進むと思うからさ」

「・・・・よく分からない・・・・」

「需要と供給、つまり、欲しい人に何かをしてあげる、それだけさ」  
「セックスをしたい男に、セックスをしてあげる女、そういうこと？」

「そうさ、それだけさ、それが基本だよ。妊娠と病気さえなければ、女にとって、痛くも痒くもないことだろうと思うよ。でもさ、一度に一人を幸せにするか、一度に十人を幸せにするか、あるいは百人を一度に幸せにするかで、随分と自分の喜びも変わってくる。当然お金も・・・・」

「そんなの無理だよ」

「でも今は、一回の苦勞で、一回のお金しか出来ないじゃない？」

「どうやって・・・・一回の苦勞で、百のお金が出る？」

「今まで、どんな男を相手にして来たか、それをまず思い出すことだ。政治家、資産家、アホ、バカ色々いただろう」

「うん、いた」



「連絡付ける事の出来るのは、どの位居るんだい？」

「そんなにない・・・」

「いいさ、居なくとも、これから出てきてもいいのだから。どんなビジネスをしたいかを、夢のような話でもいいから、作るといいよ。その夢が大きければ大きいほど、実現するには、どんな人間が必要かが解つて来る。それに見合う男をしっかりと掴むことだ」

「・・・怖いよ」

「チーミンが思うほど以上に、相手は、もっと怖がっているさ」  
「どうして？」

「チーミンの夢が大きければ大きいほど、それを実現するには、それ相当の人物じゃないといけない。つまり、男は社会的に、かなりな立場にあると言うことになる。相手は、チーミンとの事で、スキヤンダルになることを警戒する。そんな事で、社会的なステータスまでは、失いたくは無い。ところが、チーミンに協力すれば、社会的立場は保てる。しかも、損もしなければ、これと言った得も無いが、あわよくば、社会的立場をより良く出来るかもしれないと言う野心も働く。そこをきちんと見据えて交渉するんだ。ビジネスの醍醐味さこれが、日本ではバカと鉄みは使いようって言う。これに権力を足して見れば良いさ」

「出来るかなあ・・・」

「自分の家族や、自分の過去を思い出してごらん、出来るかなあじや無く、出来るんだよ、いや。やるんだと決めて歩くんだ」

「ビビッチャうよ・・・」

「ビビらずに済む勇氣は、何処から来ると思う、チーミン？」

「知らない・・・」

「それはね、自分の事を何んでも知ってるという人が居る。という安心からくるんだ」

「・・・」

「例えば、俺に隠し事をして、何が得するか、考えてみればいい」

「何も無いと思う・・・」

「でも、万引きをして、自慢を言える人がいるのと、いないのとで、どっちが良い、居ないとやっぱり寂しくなるだけだろ？」

「うん・・・」

「自分が言った嘘を信じる相手が、多ければ多いほど、寂しさも深くなるんじゃないのか？」

「騙してやったあつて、気持ちいいよ」

「その時だけじゃないのか、後で、あんな嘘言つて騙したけど、どつかスツキリしなくなつて、なんかスツキリした事をしたくなつて来る。で、又同じ事を繰り返してしまう。一つの嘘を隠す為に、又嘘をつく、いつの間にか、うその塊になつてしまふよ。最も、そう思えるうちは良いが、何も感じなくなつたら、只のドブ鼠さ。嬉しいかい、そうなつたら？」

「いやだ・・・どうして、デンはそういう事が分かるわけ？」

「チーミンより、三十五年も余計に、生きてきたからね」

「テメアはここで、クスクスと笑い出した。

「分かつたら、早速行つて見ようか」

「どこへ？」

「チーミンの言う、事務所にさ」

二人は、リスト音楽院のあるリスト・フェレンツェ通りの喫茶店を出ると、テメアは、ブラハルイザを目指して歩き出した。

路面電車のラコツェ通り駅を左に曲がると市場があり、更に進むと正面にいかにも古ぼけたビルディングがあつた。

「ここ」とテメアは言つて、ドアに鍵を差し込んで開けた。

薄暗いエントランスを少し行くと、ビルの中に広場があつた。

五階建ての各所帯の入り口は広場に面し、いかにも共産主義時代の相互監視体制を、納得させられてしまふ構造になつていた。

テメアは階段を上り、三階の部屋の鍵で、ドアを開けた。

殺風景な部屋には、大きなテレビが一台と、応接セットとコンピュータが二台、棚にはいくつものファイルがあつた。

「見ても良い？」と伝一郎は腕を伸ばした先のファイルを取った。  
「・・・いいけど」テメアは少し躊躇ってから言った。

そのファイルには、女性の写真とプロフィールが書き込んであった。伝一郎に読めるわけは無いが、セクシャルな写真を見ただけで、どんな種類のファイルなのかは察しが付いた。

「へー、結構綺麗な子が多いね、さすがに」

「なんか、飲む？」とテメアがワイン・ラックの戸を開けて言った。それから何日か経ったある日のことだった。

「デン、キャラバン買ったよ昨日」

「え、何でだよ」

「だって今住んでる所を出たら、住む所がないって言ってたじゃないか」

「ああ、ま、そうだけど、今すぐと言うわけじゃないよ」

「だから買った、それで二人で住もう・・・ね。これからさ、見に行こうよ」

川北伝一郎の生活は、絵を描きたいと言うものはあっても、描かなければいけないと言う義務はなかった。

裏を返せば、収入がないとも言えた。

今までに売れた中から、貯めた金の、六ミリオンに寄りかかったの生活は、贅沢さえしなければ、指折り数えて死ぬまでには、何とかなりそうだと思えていたからだった。

テメアは一、五ミリオンでキャラバンを買った。

「どこに停めて置けるんだい？」

「知ってる人の駐車場、只でいいからって言うから、そこに」  
伝一郎は、売春客の一人だなと思った。

何かにつけて、こうしたケースが今後も出てくるだろうと思いがちながらも、その向きの話を、彼は何も言わなかった。

長さ六メートル幅二、五メートルのキャラバンの設備は、バス・トイレ、冷暖房、ダイニングキッチンそしてシングルベッドが二つ、

まるでワンルーム・マンションだった。

「ねね、このダイニングで寝ようよ。シングル二つだけど、離れるから」

確かに、シングルベッドは左右で二つ、移動は出来なかった。

ところが、ダイニングの方は、テーブルをたたみ、椅子の肘掛を利用すると、ダブルのベッドになった。

十五年落ちのメルセデス・ベンツで、キャラバンを運んで、駐車場に移動し終わった時は、夕方の七時に近かった。

そろそろテメアの携帯が鳴る頃だと思っている所に、やはり、鳴り出した。

駐車所の管理人からは、車両の駐車はいいが、その中での生活や宿泊は禁止された。

言われてみれば最もな話だった。伝一朗は、テメアが出かけた後、メルセデスで、住宅の少ないブダ側の山肌をドライブした。

急勾配の舗装されている路を行くと、いきなり広場が目に入った。何台かの車も止まっている。案内板らしきものはなく、いや、あったが、少なくとも、駐車禁止の看板ではない事が分かった。

地図で見ると、そこはブダの山上で、ペストの町並みが展望できた。ハンガリーの首都、ブダペストは山裾を流れるドナウ川を挟んで、平野がペスト、山側がブダとなっている。

ペストの町は、遙か彼方の暗闇にまで続き、そこに溶けていた。

（もしもし、私、今、どこなの？）

テメアからの携帯だった。

「今、どこから？」

「駐車場」

「分かった、すぐいくから、待ってて」

テメアは、駐車場の管理小屋の中で待っていた。

「チーミン、すぐ移動しようよ」

「どうして？」

「だってここじゃ、寝ることも出来ないじゃないか」

「どこへ移動する？」

「これから見に行こうよ、多分大丈夫だと思うけど、詳しいことは解らないから、テメア確認してよ」

二人で、山の上まで行くと、テメアは小躍りして喜んだ。

既に、午後十時になっていたが、キャラバンをメルセデスで引いて、まず伝一郎の住んでいる家に行き、荷物を引っ越した。

これといったものが有るわけも無く、簡単に済んだが、大家が苦情を言い出した。

ベッドに傷を付けた。テーブルの脚が曲がった。床のタイルが剥がれているとかだった。

伝一郎は荷物の中から、入居する時の写真を出し、それらは、自分が入居する時に既にあつた事を証明すると、大家は黙った。

こつしたド腐れ根性の人間は、自分に都合の悪い人を、悪く言いふらすものだが、伝一郎は、言われる自分より、共通の敵を作つてしか他人と仲良く出来ず。上辺を飾つて言う人間の哀れさを思うと、相手にしたくなかった。

#### 四、放浪

山の上の夜気は既に秋だった。

テメアの未婚証明は、何処からも出て来はしなかった。

「どうしてなんだい？」

そして相変わらず、夕飯を食べようか、映画を見ようかという夕方、決まってテメアの携帯は鳴っていた。

もともとそう言う関係で知り合つたのだから、川北伝一郎は今更説教がましい事を言う事もなかった。いや、むしろ言えなかった。

言えば、果たして、その後の収入を確保できるかなれば、何もなかったからだった。

売春許可証を発行しているハンガリーで、その手の女性に、他の男とは寝ないでくれとはいえない。もし言うとなれば、その女性の経

済生活を始めとする、衣食住を保障することを意味してくる。

しかも、仮にそうできたとしても、果たして女性は、他の男と寝ないという保障はない。そう思うと、川北伝一朗はテメアに、さりげなく、性病の注意をするのが関の山だった。

人間といえば、目の前にいる両親以外に知る事もなかった少女が、ある日突然わけの分からない国へ来た。

心を開けば差別の虐め、閉じれば閉じたで嫌がらせ、ハンガリーに来て間もなく、弟のレオンが生まれた。

テメアは学校へいくのが、嫌になっていた。

両親が、女のテメアより、男のレオンを可愛がるのを見て、家の中での居場所も失った気がした。

学校での虐め、家庭内での疎外感、どこに自分のネストがあるのか、テメアは泣いた。

だが、その涙を拭いてくれる人も、いなかった。

せめてもの慰めは、公園のブランコとジャングルジムへの熱中だった。

そして唯一、自分を満たしてくれる刺激は、遊園地でのタダ乗りだった。

それを自慢する相手もいなかった。

自分の手柄を聞いてくれる、相手のいないことの寂しさを、こうして知った。万引きの手柄でもいい、親切の手柄でもいい、喜んでくれる相手が欲しかった。だが、誰もいなかった。

やがて十九歳の、孕むか死ぬかの年齢になった。

処女という未知の経験ながら、誘われるがままに、男に抱かれた。

この時の男の喜びようは、テメアにとって、尋常とは思えなかった。これで、こんなに喜ぶ人が居る事を発見したというだけで、セックスのことより、相手の喜ぶ言葉や姿が、テメアを満足させた。

その満足は、かつて味わう事のなかったことだった。

さらに、人の喜ぶ姿こそ、自分の喜びになっていった。

「デンはどうして、これが欲しい、こうして欲しいって、言わないんだ？」

川北伝一朗にしてみれば、これと言った希望はなかった。

そして又、こう言われても、思いつく事がなかった。

売春をしている事は知っている、それを止める・・・と言いたいが川北伝一朗は、テメアのその後をカバーできないことも知っていた。いや、例えカバーできたとしても、テメアは売春での金よりも、相手の喜ぶ姿が欲しいのだから、これは止める事が出来ないと、解っていた。

人間、オギヤーと生まれて死ぬまで、一回こつきり、二度はない。

悟ったように小賢しく、屁理屈並るよりも、好きにさせてみようと思伝一朗は思った。

そして、何が二人をこうさせているのかを考えてみた。

### 三十年前

川北伝一朗は二十五歳の時、中野の警察学校に入る予定だった。

合格したのだから、当たり前だった。

寸前で、ペケになった。これは、当時の妻、恵子も知って、ただ笑っていただけだった。

高校の先輩と、田舎の先輩の両警察官に聞いた。

そして事情がわかった。この事を川北伝一朗は、恵子にも、誰にも言わなかった。その頃、親父や兄貴を責める気はまったくなかった。しかし、それは川北伝一朗の甘さだった。

許すべきではなかったと、思った。

だが、何を許さないのか、許せないから、どうするのか、とにかく家族と逢う事が、まず嫌になってきていた。

現実、自分の生活にあったから、考えないようにして来ただけだった。

父の強盗殺人未遂、度重なる兄の暴力事件。

それは川北伝一郎が高校を卒業して、一年目に起こっていた。

仙台の片田舎から東京の私鉄会社に入り、研修が終わり、さてこれからが本番という時だった。

ある日を境に、社内での疎外感を感じ、いつしか居辛くなって辞めてしまった。東京で、父と兄の事件は話題にもならなかった。

東北で起きた事件に、誰も関心はなかったようだった。

だが、母から知らせがあつた時から、負い目と疎外感は、自分の中から出てきていた。

他人に責任はない、自分からそうしてしまっている、と思っていたのだが、二十歳前後の川北伝一郎を採用した新しい会社で、十日もしないうちに疎外感が湧いてきた。

そんな繰り返しをしながら、アルバイト人生がいやになり、迎えた二十五の時、応募年齢の上限だったが、警察官採用試験を受けたのだった。

二人の先輩警察官から、さまざまなアドバイスを受け、両手両足の指にも余るバイト先の中から、一番懇意にしていた所に行き、四年間勤めた事にしてもらい、職歴をごまかしての応募だった。

筆記試験から面接も終わり、一ト月もした頃、先輩警察官の一人から、家族に問題がある・・・と言われた。

日本の会社は、本人もさることながら、やはり家族の内申書が問題にされる事をはじめて知った。

貧乏だとか、学力不振程度の事ならまだ世間は許してくれたらうが、川北伝一郎の家族は常識を逸脱していた。

まともな仕事は無理と知って、川北伝一郎は日本がいやになった。その頃から、好きだった絵を描き始め、日がなアパートの一室にもるようになった。

個展と言える程ではないにしても、公民館で展示会も出来た。

見学に来た銀行勤めの岸田恵子と親しくなり、二十七で結婚したが、収入のない川北伝一郎は僅か三年で、恵子から三行半を渡された。

四十の声を聞く頃、貯めてあつた金で、英国に行く事が出来た。



外国は、学歴も氏素性にも関係なく、その作品がよければ、その場で値をつけると聞いたからだった。

その通りだった。

伝一郎の絵のファンの女性、クリスティーヌと暮らすようになり、英国滞在が取りざたされると、結婚に踏み切った。

この時、伝一郎は、日本への婚姻届をあえてしなかった。

それは、英国を出たとき、他の国でも同じ事が起きる可能性があったからだった。

日本での離婚によつて、独身となれば、行く先々の国で結婚できると知ったからだった。

英国で知り会ったクリスティーとは、二年が過ぎた頃から、二人の生活は、収入と支出のバランスが崩れ、同時に心のバランスも崩れ始めていた。

伝一郎は物価の安い、東欧を視野に入れた。

離婚手続きの煩雑さを逃れ、別居と言う型のまま、ハンガリーに渡った。

最高滞在期間の三カ月の間に、部屋が隣のシルビーという女性から男から逃げる為だから、結婚してくれと言われ、ペーパーマリッジをした。

ハンガリー国の結婚調査員が来た時は、両方の部屋が私達のものだといつて通した。

無論それを証明する大家からの書類、結婚証明証は完璧だった。

この時も、日本への結婚届は出さなかった。

そしてテメアとの事があつたが、伝一郎は重婚罪寸前、テメアの問題で救われた。

テメアの身元を証明する事の出来る書類が揃つたら、ペーパーディボースをするつもりでいた。

だが、テメアの書類は一年が過ぎても、揃わなかった。

例えばこれが、川北伝一郎との事ではなく、相手がアルメニヤ人でもハンガリー人とでも、テメアには結婚をする条件が揃わなかった。

見目麗しき美貌の乙女の夢は、ここに散っていた。

そして、前途有望だった川北伝一朗の夢は、すでに散っていた。我と我が身のひねくれが、テメアとダブって見えた時、辛かろう、寒かろうと、語って手を取り流せる涙が、そこにあった。

その後、テメアはしばらく塞ぎこんでいた。

それでも明るく振舞おうとする健気さに、伝一朗は、目の前のテメアに、胸苦しくなる程の愛しさが見え、涙が流れた。

キラバン生活第一日目の夜。

「チーミン、いいか、俺はお前のネストだ、永久に・・・な」

「ネストって・・・？」

「小鳥の巢の事・・・若いんだから、いっぱい羽を伸ばしていいよ。疲れたらここへおいで」

テメアは堰を切ったように、声張り上げてわっと、手離しで泣いた。川北伝一朗の胸で泣いた。

犯罪者家族の伝一朗は、自分の過去を語ることはなかった。

しかし、そこで味わった世間の冷たい無情は、亡命家族で育ったテメアの心情を思い半ばにして、絶句するほどの愛おしさに変わった。テメアは、川北伝一朗と居れば、無条件の安らぎをもてた。

無味乾燥無毛のビジネスタイムを持つテメアにとって、唯一のオアシスになっていった。

その出会いは、共に心に傷を隠し持ち、太陽のように生きていこうと明るく振舞い、見た目の偶然を装いながらも、互に心の片隅では必然性を認める事が出来る発芽をも感じ始めていた。

相変わらず日没の六時か七時になると、テメアの携帯は鳴った。

「電気が無いと不便だな？」

「どうして？」

「ラジオだって、何時までも乾電池じゃ、もったいないじゃないか？」

「そうか・・・」

「携帯の充電も・・・」

「発電機買っよ」

ハンガリーの短い夏が過ぎ、鈴掛けの葉が、バラバラと散っていた。ブラクテケルという日曜大工店で、ホンダの発電機を買い、五リットル入りの水五本を買い、食糧を買った。

テメアは少女に還り、部屋を飾り、音楽をかけ、何か一つをやり終わると、川北伝一郎に抱きついて、嬌声をあげて喜んだ。はしゃぎまわるテメアと、手に手をとってふざけあった。そしてテメアは、子猫が飼い主の胸で寝るように眠った。すがすがしい初秋の朝は、気持ちがいい。

伝一郎は、テメアの眠りを壊さないようにと思い、外に出た。山から見下ろすブダペストの町が輝いている。

「やだ、一人で外に出ないで・・・」

いきなり、伝一郎の後ろから、テメアの声がした。

振り向いた伝一郎を、テメアはキャラバンの入り口に立って、泣きそうな顔をしていた。

「デンが居なくなったと思ったじゃないか」

「ごめんな、気をつけるから、離しはしないから・・・ね」

謝る伝一郎の胸で、テメアは小さく頷いた。

## 五、第一歩

キャンプ場の駐車場の、柵の向こうには、切り取られたような崖になって、黄色い肌を見せている山があった。

柵を越えると、足元から緑のくぼ地が落ちている。

その中央に焚き火の跡があった。

川北伝一郎は自分達が来る前に、キャンプファイヤーでもやったのだろっかと思うと、懐かしい昔を思い出した。

うねった地層が左右に走って、左は緑の木々に隠れ、右は霞のかかった深緑の山に滑り落ちている。

その先にペストの町が、絹のベールの下に見えた。

この辺りは、鍾乳洞があり、観光客が多い。

何台かの車が、駐車所になっている広場に入ってきた。

楽しそうな家族連れだった。

「昨日ね、バイク買うことにして、今日取りに行くんだけど、一緒に行こうよ。ん、少し遠い・・・」とテメアが家族連れを無視するように言った。

「どこまで？」といって、伝一郎も、我に返った。

「ドナウバルシ・・・」

「・・・ってどこ？」

「車で一時間ぐらいかな？」

「そんなに、どうやって行く？」

「メルセデスで・・・」

「帰りは？」

「バイクで帰って来るのよ」

「だって運転できないだろ、危ないよ。電車じゃ行けないのかい？」  
「行けるけど」

「じゃ、そうしよう、バイクの乗り方は後で教えるから、まったく運転も出来ないのに買っただから」と川北伝一郎は、やんちゃで向こう見ずなテメアを見て、軽い溜息をついた。

「自転車と同じだって皆が言うよ」

「同じってさ、この前まで乗ってた自転車だって、ブレーキのかけ方知らなかったじゃないか、いいか、チーミン、乗り物を運転する時は、動かし方より止め方をまず、しっかり覚えることだよ。だめだめ、電車で行こう、な」

サンドイッチ、ジュースなどを買い、半世紀前の日本の列車を思い起こすような座席で、寄り添って居眠りしながら、目的地に着いた時は、午後二時になっていた。

ヤマハの五十ｃｃとヘルメット二つ、十万フォリント。

森と民家が混在している綺麗な街は、まるで絵本に見えた。

町を見物し、さて帰ろうとした時には、すでに四時に近く、日は落ちていた。ガソリンスタンドの広場や、車が来ない時の道で、何度かテメアが運転したが、前輪のブレーキをかける癖が出た。

「だめだめ」

伝一朗は自分が運転して、後ろにテメアを乗せ、ブダペストに向かった。

ヨーロッパには、夏時間と冬時間があり、一時間のズレがある。

冬の四時は夏の五時なる。

標識でセントラルは、ブダペストを意味するが、それ以外の標識を川北伝一朗には読み取れない。

次の道を右、今度は左と、テメアが後ろから指示しながらの夜道だった。

やがて大きな道に出ると、このまま真っ直ぐ行けばブダペストだよ、とテメアが叫ぶように言った。

片側三車線と避難道がある割には、対抗車両も、追い越し車両もなかった。後で分かったことだが、まだ開通していない、高速道路だった。

そこを五十ｃｃのバイクで二人乗り、この世で、二人だけの違反ドライブ。

何度かテメアが運転したい、といったが、伝一朗は譲らなかった。

最高時速六十キロ、バイクを買って、ブダペストの灯が見え出すまで三時間が過ぎていた。

夢中で走って気が付かなかったが、ヘルメットに無数の虫がこびりついていた。

キャラバンの停めてあるキャンプ場についてから、テメアは何度もバイクの運転をし、後輪でのブレーキで停止できるようになった。どうして前輪ブレーキの癖がついたのか・・・思い出した。

自転車の後輪ブレーキのレバーは右にあった。

テメアはバイクの、右レバーを引いていたのだった。

バイクの場合、これは前輪ブレーキをかける事になる。

つまり、左手でのブレーキは初めてだった。

ハンガリーでの、車道規則は、右側通行、これは英国や日本とは逆だった。

ところが五十cc以下のバイクに対しては、まったくの自転車扱いで、運転免許証も、ナンバープレートすら必要がないのだった。

ノーヘルは、注意されるが、それも義務ではない。

歩道走行、一方通行逆進、誰も苦情は言わない。

ブダペストには、路面電車があり、かなり便利に利用されている。

その路面を走行しても、苦情は出ない。警察が発見しても、それを小遣い稼ぎに利用する事はあっても、真面目に注意はしない。

バイクの止め方を、すっかりマスターしたテメアは、翌日からは、毎日乗り回していた。

キャンプ場から坂を下り、マルギット橋まで来た時、車が渋滞していた。

当然ながら、路面電車の通路を、普通車両は走行していない。

テメアは、同じ進行方向の路面電車の通路に入った。

ビュンビュンと渋滞車両を横目に、走る。

冷たいドナウの風は、気持ちがいい。

パポ・・・

白バイの警報を聞いた。

テメアは歩道に移動して止まり、後ろを見ると、やはり白バイの警官が近づいてきた。

「ここを走っては、遺憾よ」

「すいません」

「免許、あるの？」

「ないけど、いらないでしょ、これ・・・」

「だが、走行禁止区域を走ったんだから、罰金だな・・・」

「いつから・・・皆走ってるじゃないの・・・ほら」とテメアは走りさる日本製のバイクを目で追いかけた。

「つい最近、規則が変わったんだ。一万五千フォリント」

「そんなお金・・・ありません」

「ないって、シートに隠してんじゃないのか、いくら持ってるんだ、今？」

テメアはポケットから、二千フォリント札一枚を出して見せた。

「シートを上げて、入れておきなさい」

テメアは、えっ、と思ったが、言われたようにした。

すると、警官は手帳に何か書いている様子だったが、やおらシートに手を入れ、何か言って、その場を去っていった。

テメアは警官を見送り、何気にシートの中を見ると、そこに入れた二千フォリントの札は消えていた。

川北伝一郎はキャラバンの暖房のガスをつけ、うとうとしかけていた。

「ああ、おなかすいた、なんか作ろうよ、デン」と言って、テメアが勢いよく帰ってきた。

その夜テメアから、ペナルティーの話聞いた伝一郎は、なるほど、警官にとって一万五千フォリントの公式ペナルティーのチケットを切るより、二千フォリントを自分のポケットに入れた方がいいか・・・と思った。

テメアは、ナスのサンドイッチが好きだった。

外から帰ってきてテメアはそっぴいながらナスを切り、焼き始めた。スクランブル・エッグも、といいながら、卵を割った。

川北伝一郎はテメアの手つきを見ると、卵の殻の内側を指でふき取って、その白味をも使うのだった。

「へえ、誰に教えてもらったの？」

「ママ、もったいないからって、こうして卵を使うんだって・・・」  
亡命家族の食糧確保は、ここまで徹底していた。

食パンに、マスタードとマヨネーズを塗り、焼きナスを挟んだサンドイッチ

「ね、明日、テスコへ行つて、クリスマスの買い物しようよ、デン」  
テメアはウキウキと言って、サンドイッチとジュースの夜食をほおばった。

川北伝一郎は、好きなウオツカ、カリンカでテメアの作ったサンドイッチを食べた。

ダイニングをセットし直して作ったベッドに横になると、テメアは鼻息が早くも静かになっていた。

川北伝一郎は、買い物か・・・・・・・・。。

と、籠った声で言いはしたが、特に欲しいものもなかった。

それでも、テメアに付いて行き、テスコに入ると、クリスマス一色のセールをしていた。

そこに刺身があるわけでも、味噌汁があるわけでもなかったから、せいぜい日本の米に近い米はないかと見ただけだった。

キツコーマンの卓上醤油を一本かごに入れ、魚売り場に行こうとした時、何処を見てきたのか、テメアが戻ってきた。

「キー貸して・・・・・・・・」

「どうした、いいけど、はい、これ」

テメアは、店の外に駆けて行った。

店内は、いかにも一夜の使い捨てと思える安物ばかりで、こんな事にどうして金を使うのか、川北伝一郎には理解できなかった。

テメアがスキップしながら戻ってきた。

「どうしたの、なんか凄く嬉しそうじゃないか」

「後で、後でね、今は言えない」テメアは川北伝一郎の腕につかまり、軽いスキップではしゃぎ、店内を見て回った。

結局、買ったものは、ポテトチップと醤油、ナス、キュウリ、ジュースと食パンそれと、サンタクロースが描いてあるシャンペンだけだった。



ベントツに入り、エンジンをかけた時、助手席でテメアが、買った覚えがない箱をいじりだした。

「どうしたの、それ？」

「見てデン、クリスマススライト・・・」

「何時買ったんだ？」

「持って来ちゃった」

「え、金、払ったのかい？」

「ストローラー」

川北伝一郎は呆れた。

万引きを叱る事は簡単でも、褒める事は難しい。

キヤラバンに帰り、発電機を動かすと、クリスマススライトが点滅した。

シャンペンで乾杯し、抱き合って飲んだ。

「チーミン、もう万引き、止めな・・・」

「いいじゃない、こんなもの、どうせ店は万引きを計算に入れて、高く売る事ばかりやってるんだから」

「そうかもしれない、でもね、いつかチーミンがこの分以上の金を、損する事になると思うよ」

「分からない、どう言うことよ、それ」

「理屈じゃない、他人に迷惑かけて、自分だけ平穩なんて有り得ないと思うからさ、チーミンの万引きは天才的だと思う。でも、その為以後で不幸になるようなら、俺は辛い・・・きつい思いをしながら稼いだお金が、不本意に失う事になれば、他人を、世間を恨んじやうと思う。恨み辛みを持って、藪睨みで世間を見て生きるのと、今日もニツコリ輝くチーミンで生きるの、どっちがいい？俺は輝くチーミンがいいな。だから・・・ね」

静かな朝が明け、テメアは家族にプレゼントを持って行く、と言って出て行った。

伝一郎にとつてのクリスマスは、肌馴染む事ではなかった。もうすぐ正月、やはり富士山の初日の出が思い出された。

見えない心の富士を描いてみようと、墨をすり始めた。

濃淡四種類の墨を作り、一気に仕上げた。

その絵が乾く間、トロトロと眠り、気が付いた時は、夕方になっていた。

テメアからの連絡が、ないままになっていた。

携帯で呼び出すと、家族との雑用があつて、買い物を手伝っているということだった。

テメアがサバンナ・ビジネスを終え、オアシスに帰ってきたのは、いつものように夜の十時だった。

普通のサラリーマンなら、クリスマス休暇があつて、のんびりするところだろうが、テメアはしなかった。

それでも昼、テメアと伝一朗は、映画に行ったり、温泉に行く事が続き、やがて西暦二千年になるミレニウム・タイムが近づいた。

「ドナウの花火、見に行こうよ」

「そうだね、一生にあるか無しの機会だし、凄いらしいって噂だから」

「誰に聞いたの？」

「まさはる」

「まさはるって？」

「ん、絵描きの仲間なんだ」

「その人も一緒？」

「いや。寒いから、車から見物できるような所があるといいね」

「ゲレルートの丘へ行こうか、デン？」

「ああ、あそこなら絶対だ、花火、何時から？」

「ミレニウム0時から、今から行けばいい場所取れるよ、きっと」

「ヨーシ、いくかあ、なんかおやつ持って行こうよ、水とかさ」

「私が作る、待ってて」とテメアが言くと、茄子を輪切りにし、油で焼き始めた。

その間に、四枚の食パンにマスタードとマーガリンを塗り、焼きあがった茄子を挟んだ。

伝一郎はコートの下にジャケットを羽織り、テメアは、ジャンパーにマフラー、そして帽子も忘れない完全武装をして、十時にキャラバンから外に出た。  
外は満点の星だった。

## 六、思い出作り

風は無い、ピリリと肌を締め付けるような寒さだけが、二人をせかせた。中古にもかかわらずメルセデスは、一発でかかった。

ゲレルートの丘に着くと、それほどの人出はまだ無かったが、やはり心置きなく花火を見物しようという人々がすでに集まって来ていた。

ドナウ川を見下ろせる道の反対側には、夜店が軒を並べ、ソフトドリンクやビールを売っていた。

ハンガリー名物の筒になった菓子パン、クールトウシ・カラチやハート型に焼き上げたペレッツ、今夜だけのラツパの玩具、ドウダが売られている。

あちこちで、そのラツパの音が気の無い音を出していた。

月桂樹の葉を高く掲げた女性のサバドウサアグ（自由）の像が、町を見下ろしている。

その足元に、高射砲が展示され、皮肉な印象を与えていた。

伝一郎とテメアはコーラとフアントを買い込み、ベントツの中でサンドイッチを食べた。

「デン、カラチ食べたいよ」

「カラチって？」

「ほら、あそこで焼いてるでしょ。筒に巻いて砂糖がたっぷり付いていて、暖かいうちがとっても美味しいよ」

「ヘエー、変わったお菓子だ、ン、買っておいでよ」

「一緒に行こう・・・」

「ん、あ、そうか、行こう」

ゲレルートの丘を見物し、車に戻ってサンドイッチを平らげ、カ  
チを頬張ってしまうと、どこか手持ち無沙汰になった。

「一寸出ようか？」

「うん」

再び車から降り、歩道に立つと、眼下には、ドナウ川が黒い帯のよ  
うに横たわり、ブダとペストの間にあった。

ブダの山肌に張り付いたような明かりとは違って、ペストの町の灯  
が星空に負けまいと輝いて、はるか草原の彼方へと溶け込んでいた。  
ミレニアム0時きっかりに花火は上がった。

花火と同時に、暗闇にいた群集のどよめきが起こった。

ドナウ川から上がる花火を山の上から見ると、幾分眼下に咲いた。  
息つく暇もなく揚げられる花火の硝煙は、緩やかな風に乗って、な  
るほど夜空を焦がすというより、川面を焦がすと言う感じになっ  
ていった。

伝一郎は日本に居た時、一度、恵子と神宮球場での花火を見た事  
があり、それを思い出すと、いかにも日本を引きずっている気がした。  
正月が過ぎ、極寒の二月になる頃、外出していたテメアが、しょん  
ぼりして戻ってきた。

「どうしたの。元気ないようだけど？」

「ペナルティーが来た・・・」とテメアは、キャラバンに入りなが  
ら言った。

「ペナルティー、なんの？」

「バイクの・・・」

「どうして・・・？」

「この前、家族の買い物手伝ったって言ったでしょ、あの時、ママ  
を乗せて一回、弟を乗せて一回、合計二回、二人乗りでつかまった。  
・・・」

「いくら来たんだ？」

「三万フォリント・・・」デンが言っていた事、分かった気がする」

「払わないと、どうなるんだ？」

「牢屋に入れられる・・・」

キャラバンの外で唸っていたホンダの発電機が、もうすぐ燃料切れになることを知らせる音に変わった。

「あ、ガソリンが切れそうだよ」

「今日は、このまま寝ようよ、デン」テメアがそう言うと、いくつかのキャンドルに火を点した。

伝一郎はその間に外に出て、キャラバンからコードをはずし、発電機を中に入れた。

テメアはうずくまる様に、伝一郎の胸に顔を押し付け、眠った。

ピシッ、ピシッと、寒気がキャラバンに突き刺さるような音がした。伝一郎は、ややもすると、傷をなめあうような心境になってきたが、それだけはしなくなかった。

それにしても、払わないと、どうなるんだ、と聞いた自分が、コメデアンに見え可笑しさが込み上げて来た。

過去を引きずった生き方は、あまりにも惨めに思えたからだだった。そして、愛されることを知らずに、いや、愛し愛されていたのだったが、裏切りの連続に、いつか愛することを忘れ、愛されることに煩わしささえ感じていた。

目の前に居る女性テメアは、愛に渴ききっている事を知っているが故の、粹がりで生きている。

愛することへの意気地のなさ、売春婦テメアによって再び、試されているのかもしれないと、川北伝一郎は思った。

そして、掛け値なしで、愛してみようと思った。

愛すると言うことは、自分の欲望の前に、相手の欲望を叶えてあげる事だと決めた。

我慢して、と言うような皮相的なものではなく、選ばれた者の使命感感としてだと、決めた。

我慢には苦痛が伴うが、使命感は喜びの泉になって行く。

だが、伝一郎はテメアの好き嫌いという我がままや、損得の打算、さらには社会性における善悪の判断に妥協はしなかった。

自分の好きな事だけで、生きていくことは出来ない。

損を恐れていたのでは、得た時の喜びが小さい。

社会に対する善悪を無視していると、いつしか自分が悪に染まり、悪から見た善は全てが悪に見え、社会から阻害を受ける。

やがては孤独の中に、生きるようになってしまう。

それは、孤独に勝つことの難しさを知っているテメアにとって、最も辛い環境でしかないと言ひ、テメアの万引きがいい例だったことを話すと、万引きの手柄を自慢していた彼女は、バイクによる思わぬ出費をした事で、川北伝一郎の言った事の、何かがわかっていった。

だが、二人はどこまでも二人だけの間で納得できても、間接的な社会への迷惑までは気が付かなかった。

「デン、カラオケのリーを覚えてる？」とテメアが言い出したのは、伝一郎の観光ビザがもうすぐ切れる頃だった。

「ああ、覚えてるよ、どうかしたの？」

「あのね、リーが絵を描いて欲しいって……」

「絵を……どんな？」

「何でもいいから、日本らしいのが良いって言った」

「でもそろそろ、又外国に出ないと……」

「ん、それでね、リーが労働ビザに切り替えてやるから、絵を描いて欲しいって言ってたよ」

「ああ、そういうことか、じゃさ、今夜にでも行つて見るか」

その夜、テメアが戻つた十一時ごろ、二人は久しぶりにカラオケに行つた。さすがに、ホステスの顔ぶれも変わつていたが、ウクライナから来たと言つていた美女二人は、この時居なかつた。

「住所、どこなのデン？」とリーはどこか事務的に聞いた。

「どうしようか……？」と伝一郎はテメアを見た。

「パパの住所と同じで良いよ。私もそこにしてあるから」

「テメア、そこはどこ？」とリーに聞かれ、テメアは書き込んだ。

「観光ビザ、あと何日残ってるデン？」

「あと四十日かな」

「おお、充分だ。三十日以上あれば申請は簡単だからさ」とリーは軽く請け負った。

書類を書き終わると、伝一郎とテメアはカラオケで遊ぼうと部屋に入った。テメアの十八番は、ケリーだった。

失恋の歌なのか、慕情なのか、情熱の歌なのかよく分からないままに、伝一郎は聞いていたが、テメアの歌は下手だった。

一時間遊んで部屋から出ると、見知らぬホステスが三人いるだけで、ウクライナから来たと言うホステスは、まだ居なかった。

伝一郎が、忙しいのかい、とリーに聞くと、四つある客のいないカラオケルームを無言で指した。

「あの美女はもう辞めたのか？」と伝一郎が聞くと、テメアは引張って帰ろうと言い出した。

外に出ると伝一郎は、何かと世話になりそうな相手だもの、話でもしたかったという、と、テメアは、分かるけど、あんな話しは駄目だといった。

「どうしてなんだい？」

「皆、お金が欲しいのよ・・・」

「・・・ああ、そういうことが」

伝一郎は、女が金を求めた時、何をやりだすか知り尽くしていた。そしてこれは同時に、テメア自信の事でもあっただけに、伝一郎は言葉を切った。

「でも、いくらなんでも、ウクライナから来て、姉妹でなんて・・・」とテメアはさすがに、声こそ口ごもってはいたが、呆れると言う風だった。

翌日の昼過ぎ、モリジグモンドへ、伝一郎とテメアそしてリーの三人で行き、アジア系労働ビザ申請のエキスパートだと、リーは言っていて、伝一郎に話しかけていた。

その事務所に行くと、リーは揃えてある必要な書類を出した。

何枚もの書類を、一枚一枚点検し終わると、これで後は、呼び出しを待っていれば良いよ。とリーは言った。

メルセデスでキャラバンに戻った時は、既に暗くなっていた。

伝一郎は、テメアに富士山の絵を見せ、お礼に、これリーにあげようか、と言った。

テメアはなぜか深刻な顔をしていた。

「どうしたの、これ、どう思う？」と川北伝一郎は絵の事を言った。

「住所が欲しい……」とテメアが唐突に言い出した。

「住所、そうか、家か、いくらで買えるんだいここでは……」

「知らないけど、欲しい」

「少し搜してみようか？」

と、伝一郎が言つと、テメアは思案気に頷いた。

「明日から、探してみようよ、家」

「ん、そうしようか」とテメアは元気な笑顔になった。

テメアは、バイクのペナルティーで、そして川北伝一郎の滞在の事で、住所不定への後ろめたさを感じていたのだった。

## 七、住所

いつもより早く起き、朝飯を作っていた。

「デン起きて、もう九時だよ」

「九時って、どうしたんだい、一体」

「今日は家を捜しに行くつて、約束じゃないか」

「どこへいくんだい、それでさ？」

「決ってるじゃないか、不動産屋にだよ」

「あ、そうか、ま、そうだよ。一体いくらの予算を考えてるの？」

「私、二ミリオンある、デンは？」

「五ミリオン、でも後が掛るから、半分の三ミリオンなら出してもいいよ」

「メルセデスで行くと駐車に困るから、バイクで行くよ」



「バイクって、チーミン二人乗りできないじゃない」

「平気よ、歩道を行けばいいんだから」

伝一郎に、その意味が理解できなかった。

テメアの作ったサンドイッチを平らげ、二人は、五十ccのバイクで、山を降りていった。

マルギット橋まで来ると、歩道に上り、ゆつくりと走っていった。何軒かの不動産屋を回ったが、三ミリオンで買える物件は見つからなかった。当然といえば、あまりにも当然なことだった。

トルコのファースト・フードレストランでギロスを食べ、ドナウの岸で休み、さらに何軒も回ったが、やはり、無かった。

「新聞買う」とテメアが言い出したのは、コロシ広場の不動産屋を出た時だった。テメアは四種類の新聞を買って来た。

すでに冬時間の午後三時は、薄暗くなってきた。

「キャラバンに戻って、ゆつくり見ようよ」

「だめ、ガソリンがもったいない」

なるほど、と伝一郎は思い、感心もした。

「どうする？」

「マックに入ろうよ」

「ああ、そうか、そこでなら電気代がかからないと、そういうことだ」

マックに入って、頼んだのは、一杯のコーラだけだった。

そこでテメアは新聞を広げ、丹念に眺めだした。

しかし、これといった予算に合う物件はなかった。

一番安い物件でも、七ミリオンだった。

テメアは溜息をつく、新聞をゴミ箱に捨てた。そこに携帯が鳴った。

伝一郎の理解できないハンガリー語で、何か話していたが、切ると、テメアはこれから出かけるといった。

いつもの事で、伝一郎は何も言わず片頬を歪めただけだった。

テメアは二時間もしたら帰ると言い残し、マックを出、バイクで消

えた。

伝一郎は、バスでキャラバンまで帰った。

テメアがキャラバンに帰ってきたのは、いつものように十一時に近かった。

外で唸っているホンダの発電機の排ガスに混じって、何処と無く春の匂いが漂う、静かな夜がキャラバンと共に、二人を包んでいった。目を覚ましたのは昼近くだった。

キャラバンにはトイレも設置されてあったが、水がもったいないということから使用はしていなかった。キャップに穴のあいたペットボトルを持って、近くの藪でトイレを済ませ、携帯の充電の為に、発電機を動かした時、テメアの携帯が鳴った。

午前中に鳴る事が珍しいだけに、何かとテメアは顔を曇らせた。すぐ戻ると言い残し、テメアは事務所に向かった。

三十分もしないうちに、伝一郎の携帯が鳴った。

（デン、すぐブラハルイザに来て、家が見つかったんだよ。覚えてるか、そう私の事務所の近く、着いたら電話して、良い？）

川北伝一郎はキャラバンのドアに鍵をかけ、メルセデスで向かった。市場の駐車所に車を止め、電話をした。

テメアはすぐに出てきた。

「デン、とにかく見てよ」

「ああいいよ」

伝一郎は、車をそのままに、テメアの後になって、右にあるバチヨ・ベラ通りに行った。

百メートルも歩いた所で、ナンバー六のドアを入り、ナンバー五の部屋をノックした。中から、石を蹴って、当たればその人と言えるほどに、ありきたりな女性が出て来た。

話は簡単だった。間口三メートル、奥行き十メートルが、中間で仕切られ、部屋が二つ、押入れの大型のような部屋を、三ミリオンで売りたいと言うことだった。

間口こそ狭いが、床から天井までの高さが四メートルの部屋が二つ。

入ってすぐ、キッチン、バス・トイレがあり、奥の部屋はまったくの空間だった。確かに部屋は二人生活に、何の不自由の無い設備だった。

聞けば、住人の姉だというその女性は、住んでいた弟が事故に遭い片足を失って一人での生活が出来なくなったので、大至急売り払いたいと言う事だった。

話はすぐに決った。

仲介に不動産の弁護士を立てる為、早速その事務所に向った。

売り渡しの書類は揃っていた。買い取りの書類が目の前で揃えられ、と、テメアが目を通した。

全ての書類は調えられ、伝一郎は即金で払い、その場で部屋の鍵を手にとると、弁護士の事務所から、再びブラハルイザに向かった。

「チャーミン、この、奥の部屋に二階を作ろうか？」

「え、どうやって？」

「何、簡単だよ、材料さえあればね」

「材料って、何？」

「木材だよ」と伝一郎が言うと、テメアは何か思案顔になった。

「パパに言ってみる」とテメアはその場で電話をした。

テメアは、友達との会話はハンガリー語、家族との会話はロシア語を使っている。当たり前のことながら、伝一郎に会話の内容は分からない。

「デン、パパの家に行こう、すぐに、今」

「い、今すぐにかい？」

メルセデスで二人は、テメアのパパの家に向かった。

既に話を通じていたらしく、パパのユリーは住まいの地下に伝一郎を案内した。そこには、なんと、角材が山ほどあった。

「どの位要るんだ？」とユリーは伝一郎に無造作に聞いた。

「延べ三十メートルあれば足りますね」

「そうか、持って行っていいが、作るのは手伝えないけど、いいかい？」

「大丈夫です」

何度か車で往復しながら角材を運び終わった。

「チーミン、これを製作する道具が要るから、これから買いにいこう」

ホンダの発電機を買ったプラクテケルに行き、電気鋸、鉋、ドリルを買い、部屋に戻った。

「まずこの角材に鉋をかけ、綺麗にしたら四メートルを二本、二メートルのを四本作って、残った角材を縦割りにし、柱を作る」

「私は、何を手伝える、デン？」

「これって事もないけど、食べ物を用意してくればいいよ、腹が減っては、何にも出来ないからね、とっても大切なことだから、頼むよチーミン」

「分かったよ、デン、この床、黒くなってるけど、張り替えた方がいいんじゃないのか？」

「そうだね・・・張り替えなくとも、磨けば大丈夫だと思う」と言っ  
て、床をナイフで引っかいてみると、白木の肌が見えた。

「どうやって・・・？」

「サンダーを買ってさ」

「なに、それ？」

こうしてサンダーを買いに再び出かけた。

道具も揃い、材料も充分にある。川北伝一郎は、ミスは許されないと、真剣になった。

放浪の絵描きといえば、どこか聞こえはいいが、やはり宿無しの浮き草人生をかみ締めていた彼は、思わぬ永住の家を持ち、興奮していた。

キャラバンで、行き当たりばつたりの人生で終わろう等と、言っていた自分の言葉が、今では、まるで嘘だった事を、認めなければならなくなった。

衣食住、これは手にしがたい順序かもしれないとも、思った。

ゴミ箱に、衣は転がっていても、食は無い。

それでも、物乞いをすれば、衣と食は何とかなりそうだが、住は、となると、もはや絶望に近いものを感じていた。

それだけに、ここで住を手にした事が、例えそれが誰かと比べて、貧しいものであっても、伝一郎の中では、御殿に成って行った。そして、この思いはテメアにとっても、まったく同じだった。

テメアの下にはレオンを頭に、弟妹が四人もいる。

ロシア兵まがいの説教をする父や、嘘を付き、自分から金をせびり、平気で万引きをする母のいる家庭で、生活を共にする気は、まったく、無くなっていた。

「一、五ミリオン、必ず払うから、受け取って」とテメアは言つて、十万フォリントを伝一郎の目の前に出したのは、一週間後だった。それだけに、伝一郎は製作にも力が入った。

奥の部屋を作る伝一郎と平行して、テメアがキッチンの床にタイルを張っていった。

二人の家は、まったく小さいが、トイレを新品にし、シャワールームを取り付け、奥の部屋には、ハンガリー語でガレリヤと言う二階が出来た。

一階の床はサンダーで磨き、立派な空間が出来た。洗濯機と大型の冷蔵庫も買って、キッチンの新しいタイルの床に置いた。

二階にはカーペットを敷き、完成したのは、一ト月後だった。

こうして新生活を始めた二人にとって、この小さな空間は、宇宙級の開放感があった。

テメアは、そうした開放に流されることも無く、三カ月後には、一、五ミリオンの金を伝一郎に支払った。

さらにテメアは、伝一郎が留守をしている間に、父ユリーの車で、事務所のテレビは自分の物だといって、運んで来た。

「この辺りは、ジプシーが多いから、部屋に居ても、ドアには必ず鍵を掛ける事、何かと気をつけないといけないぞうだよ」とテメアは、辺りを探るような目つきでそつと言った。

「何が問題なんだろう？」伝一郎は、同じ人間なのに、どうして警戒めいたことを言うのか分からなかった。

キャラバンと、バチヨ・ベラ通りを往復しながら、室内を作っている間に、なるほどと思える事が目に付きだしてはいた。

路のあちこちには、犬の糞が目立ち、酔っ払いが立ちションベンを平気でしている。ホームレスだろう、ぼろをまとったまま、路に寝ている。

近くの公園に、シルバーや桜の芽が見え出す頃、二人はここに住むようになった。

二階に、ダブルのスポンジ・マットレスを置いて、寝た。

テーマは、相変わらず夕五時か六時になると、バイクで出かけていた。

伝一郎の仕事は、始めこそはかどらなかったが、富士山の絵をリーに届けて以来、カラオケに来た客から、注文があつた。

何気にテレビのチャンネルを変えていると、いかにもセクシャルな画面の多さに、この国の教育や文化の程度が、見え隠れしているのに気が付いた。

いくら画面に、年齢制限を示す案内があつても、果たして、それを守る国民がいるのだろうか、と思えた。

日本でなら、明らかに放送禁止の海賊テープか、闇の世界にのみ流通する類のフィルムが、ここでは堂々と流れているのだった。

初めこそ興味を持って食いつくように見ていたが、やがてあまりにも、そのグロテスクさに、嫌気が刺していった。

そんなある日、テーマが電気コンロを買ってきた。

「ああ、これ、電気食うよ、ガスの方が安いはずだし」

「フフ、心配ないよ、デン。これから二人で、友達の家に行ってみないか、面白いものを持っているんだよ、それを買いに」

テーマの言う友達の家は、バイクで十分位の所にあつた。

外見の古びた感じのビルディングの割には、中に入ると、案外に綺麗な作りになっている。

三階への階段を上りきったすぐの所に、友達の部屋はあった。

ブザーを押すと、すぐにドアが開き、入ると犬が尻尾を振って寄ってきた。友達は小型のトランスを手にも、テメアに何か説明を始めていた。

そのトランスは、三ボルトから十二ボルトまでの、可変小型トランスだった。

アウトプットのコードの先が、見慣れているものとは違っている。長さ二センチ幅五ミリくらいのボルト字型の小さな鉄板が付いていた。

トランス本体の二本の差し込み部分の片方に、プラスを示す傷がある。

友達はそれを、自分の家の電源安全ブレーカーのところへ行つて、実演を始めた。

通電チェック用のドライバーを差し込み、プラスの電極を確認すると、トランスのプラスと合わせて刺し込んだ。

当たり前に電気メーターは動いていた。

ブレーカーのスイッチの僅かな隙間に、ボルト字型の鉄板を刺し込んだ。

バチッとブレーカーの中で、電気がスパークして光った。

そして友達はブレーカーのスイッチを切った。

なんと、電気は消えなかった。

しかもメーターは止まっている。

友達がニコリと、伝一郎を振り向いた。

それが一固四千五百フォリントだという。安い。

これを家に持ち帰り、早速セットすると、見事に電気のメーターは止まり、家の中の電化製品は、何の支障もなく動いた。

こういうことに関し、ハンガリー人は、実にすばらしい悪知恵がある事に改めて感心する川北伝一郎だった。

「いいかデン、めったなことでも、ドアを開けてはいけなぞ、これがばれると、罰金が二ミリオンくるから・・・」

言ってしまったえば、電気泥棒な訳だから、伝一郎は納得した。

その後、電気量の請求書が来たが、いつ調べに来たのかと伝一郎とテメアが話し合ったが、覚えは無かった。

ところが水道のメーターは調べに来た。

それも、自己申告で通ってしまふ事が分かり、月に二千リットルだけ使ったことにした。

水と電気は、明らかに詐欺泥棒をしているという、川北伝一郎は日本人らしい気に病んだが、それも何時か気にならなくなっていった。それにしても、どうして電気の使用量が分かって、請求書が来るのか、こつちに留守が多いから、検針員は勝手に数字を書き込んでいるのだろうと思った。ところが、部屋の外にもう一つ電機メーターがあり、それも自分達のもだとわかった。

二人は、どうしてなのかと、そのブレーカーのスイッチを切ってみた。

テレビは付いている。

では一体何が止まったんだろつと、電灯、コンセントなどを調べたが、異常は無かった。

ふと、シャワー室の上に備えてある、温水タンクのパイロットランプが、消えているのに気が付いた。

「チーミン、ここを見てて・・・」と言って伝一郎は外で、ブレーカーのスイッチを上げ下げすると、中でテメアが、点いた、消えたと叫んだ。

外の電気メーターは、温水器専用だった。

そして検針員は、それを見て請求書を作成していた事が分かった。

電燈代は、向こうが無視していることになった。

使用量をあわせても、夏と冬に多少の違いはあったが、月々ほぼ二千フォリント、日本円に換算しても僅かに、千円程度の請求が来た。

「デン知ってたかい、カラオケ屋のウクライナ姉妹、かなり荒稼ぎしてるらしいよ」



「え、やっぱりそうなのか、美人はいいな」

「ライセンスが無いのに、みつかったら、大変だよ」

「何、ライセンスって、売春婦に、そんなのがあるのか？」

「今、テレビでやってたじゃないか」

「あ、そうなんだ。で、どういうことなんだい、それってさ？」

「今テレビでやってたのは、警察が、女性の言い分を無視し、罰金を請求したんだよ。女性もいくらか恥ずかしかったらしく、黙ってそれを支払っていたんだけど、いよいよ金が無くなって、払えないとなったら、財産を差し押さえるということになって、初めて裁判所に訴えたんだよ」

「どうして初めから、そうしなかったんだろ？」

「そりゃ、やっぱり仕方ないみたいな事じゃないの」

「でも、女性には正当なんだから、はつきり言えばよかったんだよ」

「でもさ、仕事の仕事だから、あまり表沙汰になっても嫌だったんじゃないのかなあ」とテメアは、どこか同情めいた理解を示した。

「そうかもしれないがさ・・・」と伝一郎は言って、テメアが売春という仕事に対する恥辱的なものを持っているという事だと思つと、どこかほつとするものを感じた。

それにしても、事実かどうかはとにかく、ウクライナの姉妹が揃って売春行為で荒稼ぎをしているという事が、やはり女のしたたかさを見たと同時に、死にたくないから食べると言う、本能を思えば、言葉が出なかった。

テメアはこの頃になって、もう売春はしていないと言うが、果たして・・・と伝一郎は思った。

食う為には、生きる為には、そして死にたくないという切実さに迫られれば、仕方がないのかもしれないが、それへの正当性を本人が持っていない事への、言い訳だろうと、やるせない解釈を川北伝一郎はするのだった。

テメアがやっていないと言うのも、羞恥心の現われだろうと思えば、必死に生きようとしているその姿が、いじらしくもあった。

川北伝一郎があと十年生きたとして、その時テーマは三十になる。このまま社会的に通用するスキルが無いまま、三十になって、金に困れば、元の木阿弥になるような気がした。

生きるに、後ろめたさのない正当性があっても、人は孤独になる。所詮人間は絡み合う事が出来ても、溶け合えないのだと解れば、その孤独の中から、人は何かを達観出来る事がある。

この反対の孤独は、後悔にさいなまれ、恨み辛みを並べ、愚痴の人生へとなっていくような気が、伝一郎はした。

それにしても、黙認している自分の中が、どこか苦い気がした。

だからといって、伝一郎には、それへの対策も無かった。

有るも無いも、考えること事態が、深窓生活者の無責任な奇麗事でしかないだろうとさえ、思えて来ていた。

テーマの嘘は、底が浅い分、可愛いものだと思いつながら、伝一郎は、奇麗事を言う人間はその分、人を惑わすから、質が悪いと見ていた。だが、それを口にしたとたん、自分に非難が来ることも知っていた。伝一郎だけではなく、誰でもこの非難は受けたくない。

ましてやいかにも正しい事、奇麗事を言う人間を、何の裏付けもないまま、嘘つき呼ばわりして、済む訳が無い。

しかし、そうした事が社会全体に蔓延した時、宇宙の大自然は、これを無視しないのも、世界史は語っている。

## 八、突風花火

ブダの山並みが新緑に包まれ、山を切り開いて出来た道の崖には、カスミ草や、水仙、山吹きなどの花が咲き始めていた。

町行く人のファッションが、日足の長さで暖かさの中で、華やいだった。

「チーミン、家があるんだからさ、キャラバン、もう要らないんじゃないのか？」

「うん、そのこと考えてたんだよ、私も」

「買ったガレージへ行つて、売ってもらつたらどうだろ？」

「聞いたんだけど、五十万じゃ安いんだよ」

「一ミリオンの一年落ちだからだろうね」

「知ってる人が、もしかしたら買ってくれるかもしれないんだけど・

・」

「いくらで？」

「八十万で……」

「なんだ、じゃ、知ってる人の方がいいじゃないか」と伝一郎は、  
テメアの言う知人とは、自分の客のことで、詳しい事を言えないで  
居るテメアを察し、相手の名前だとかの、余計なことは何も聞かな  
かった。

こうした時、伝一郎は、ハンガリー語を知らない事の平和を感じた。  
単純な事ながら、テメアは言い出すと行動力がある。

この時も、その場で相手に電話をした。

「オーケーだつて、現金で払うからすぐ来いって、行ってもいいか  
？」

反対する理由は、伝一郎に無かった。

「キャラバンの鍵、何処？」

「ああ、これだよ」

「それを持って行く……、多分すぐ移動すると思うから」

「そうか、早いね」

その日、テメアは夕方になってから家に帰ってきた。

「どうだった？」

「うん、お金は銀行に入れてきたし、キャラバンは、相手が持って  
行った」

「フーン、案外簡単に片付いてしまったね」

伝一郎は、半年前のキャラバン生活を思い出した。

不便といえは不便かもしれない。

根無し人生といえはまったくその通りだと思う。あれを生涯続けれ  
ば、人は、口で羨ましい事を言っておきながら、必ず軽蔑するに違

いが無い。

例えキャンプ場にしても、そこに定住することは許されない。空き地にしても、何時立ち退きを要求されるか、不法滞在となれば、嫌でも移動しなければいけない。移動には、最低でも燃料がかかる。只というわけには行かない。しかも、身一つならいざ知らず、キラバンを引いてとなれば、国境の検問の厳しさは数時間にも渡って、その手がベッドの下にまで及ぶ、不審物、いや、気に食わないものが出てくれば即刻逮捕となる。

こうしたことは、短期間の滞在には、何の支障も無いのだが、煩わしさを避けるために、移動という煩わしさが現れる。

手に入れにくい順序の衣食住、その住を手にする事が、自然その人間の価値に繋がっている気が、伝一郎はした。

あれは、いつときのレジャーだった。

それにしても、なんと懐かしく、楽しい生活だったかと、うきうきした小学時代の、遠足を思い出すような気分伝一郎はなっていた。

日本で言う梅雨時、ドナウ川は、雪解け水で増水する。それも収まり、輝く川面を、滑るように行き交う観光船には、世界からの観光客で賑わっている。町の広場や公園では、週末の青空市場が夏の陽射しと共に、盛り上がる。伝一郎はドナウ、というテーマで、ブダペスト市内に架かっている橋を写生して回った。

亡命家族のサバイバルに、耐え忍んできたテーマの気持ちも、盛り上がっていった。

そろそろ夏もピークに差し掛かり、急速に秋の香がする八月になった。

「デン、シティー・パークに行こうよ」

「何かあるのかい？」

「今日は、催しものがあるんだよ、ほらあの青空市場でさ」

テーマは子供っぽくはしゃいで、伝一郎をせきたてた。

「その後、ドナウ川に行こうよ」

「あ、そう言えば、今日は二十日だ」

八月二十日は、ハンガリーの建国記念の日であり、憲法記念日に当たっていた。

一八九六年が、ハンガリー建国一千年に当たり、シティー・パークの入り口に英雄広場が建設された。

国を挙げてのこの記念の日に、ドナウ川では、航空ショーと花火大会が毎年開催されていた。

シテイパークの中は当然に、そこへの道も、人だかりで混雑していた。

「風が・・・強くないか？」

「風、平気よこの位」

「空をみなよ、雲足が速くなっている」

「だからなによ」

「きつと来るよ、いきなり強い風が、この混雑の中でそんな事にもなったら、それこそ大変な事になるよ」

「うん、もしそうなれば大変だね」

「なつてからじゃ遅いよ、もう出ようよ、そしてドナウに行つて見ようよ」

「分かった、じゃ、出店を見ながら帰ろう、ね」

「そうしよう」

二人はここへ来て、出るまで三〇分ぐらいだった。

シティー・パークから出ると、樹木の無い英雄広場は、かなりの強風になっていた。

「あ、雨が降ってきた」

「降ってないよ」

伝一郎が、雨の一粒を受けて言ったが、テーマが風に乗ったパラリ降って止んだ雨に、雨だと言い出すまで、数秒かった。

丁度バスに乗った時、浴室が抜けたような雨が降り、さっと止んだ。「家に寄ってから行こうか？」

「うん」とテメアは素直になっていた。

バチョベラ通りの、小さな我が家に帰り、テレビをつけた。

「ほら、チーミン、見てごらん、これ」と伝一郎は画面を指して言った。

画面の中では、宗教儀式が、厳かに執り行われていた。

ハンガリー語の分かるテメアは、画面に食い入った。

テレビカメラが、突風で椅子が吹き飛ぶ様子を追う。

やがてそこを大雨が襲い、逃げ惑う参加者を追う。

まるで、映画のワン・シーンのように捕らえていた。

飛んでくる椅子を避けて逃げる人々、雨に滑って転ぶ人、子供を抱いて守りながらの父親が走る。

祭司の法衣が風に煽られ、雨に打たれ、すばやく建物の中に身を隠す。テレビは、何度も同じ場面を繰り返していた。

これはテロじゃない。大自然が、何かに対して猛威を振るつての警告かもしれないと、伝一郎は思った。

画面に食いついていたテメアが、伝一郎を振り向き、目を輝かして興奮している。

三十分前にこんな惨事があった事など、嘘のように窓の外には陽が照っていた。

「晴れ、時々わか雨かな」

「花火は大丈夫だよ。そろそろ飛行機ショーも始まる頃だから行く」

「買い物袋二つ持って行こう」

「買い物するの？」

「いや、イザという時に傘の代わりにするんだ」

「傘があるんだから、持って行こうよ、こんなじゃ、恥ずかしいよ」

「いや、風が出た時に、傘は危ないよ」

「そうだね、何も無ければ、荷物にならなくて、いいね」

外に出ると、太陽が濡れた通りを照らし、惨事の名残りを思わせた。

バチヨ・ベラ通りのあるブラハルイザから、バスで四つ目のバス停にエリザベート橋がドナウ川に架かっている。

エリザベート橋の袂のバス停に着いた時、午後からの航空ショーは、見事な晴天の上空に、爆音を轟かせていた。

赤、青、黄色の小型飛行機三機が、交代で何処からか飛び出してきて、川面スレスレに飛行し、エリザベート橋の下をくぐり、浮いているポールを縫って飛んでいった。

小型飛行機が消えると、川の上空にヘリコプターが待機しながら、次に演技をする飛行機を待っている。

何処からとも無く爆音がすると、ヘリは山裾へと消えていった。

そろそろショーも終わりに近づく頃、空軍のジェット機が、六機で編隊飛行を始めた。

耳をつんざく爆音とは、この事かもしれない。小枝が震える。

テメアが興奮のあまり、伝一郎の耳元で出す絶叫さえ聞こえない。

絶叫の最中に上空のジェット機が去ると、テメアの絶叫に伝一郎はビックリした。

その顔を見て、テメアが笑う。笑う声に釣られて伝一郎も笑った。

ショーが終わり、穏やかな夏の夕暮れと、爽やかに心地のいい川風とが町を包んで行き、ほのかな町の灯が点き始めた。

「なんか、食べようか？」

「出店は高いから、持ってきた」とテメアは、買い物袋を開けた。

「あれ、気が付かなかった、さすがチーミン、アイ・ラブ・ユー」

テメアが悪戯っぽい笑顔で、伝一郎にパンとジュースを見せた。

ブダペストを流れるドナウ川を、上空から眺めると、川に沿って左右に二本ずつ道路がある。

内側の道は、川岸から石垣を登ってガードレールが有り、その道が花火大会のメイン会場になっていた。

ガードレールの反対側には、道から五メートルくらい高く、コンクリートの土手になっている。コンクリートの土手にある階段を上る

と、さらに道があった。

この外側の道には、下からのコンクリートの土手がそのまま、路面から高さ一メートル、厚さ五十センチの塀になっていた。

多くの人がそうしているように、その塀に二人は、川に向かって座った。

上流のマルギット橋から、鎖橋、エリザベート橋、そして自由橋まで、四つの橋で区切られた三ヶ所の川面は、鎖橋とエリザベート橋の上から上げられる花火の、鏡になる予定だった。

当然この二つの橋は、通行禁止になっているが、四つの橋の区間道は今日、すべてが歩行者天国になっていた。

ドナウ川には、木の葉を散らした様な大小の遊覧船が浮かんでいた。同じ水面を小さなモーターボートが、けたたましい音と白い大きな波を立てて、遊覧船を縫うように、通り過ぎて行く。

川向こうの丘に建つ、ブダの宮殿を眺めている分には、いい夕涼みになるが、足元を見ると、絶壁に見え、つい尻込みをしてしまうほどだった。

二人は、食べ終わると、花火が始まる九時までに、まだ時間があるから、散歩をしようと、そこから背にしていた道に降りた。

「何処へ行ったって、花火だもの、首が疲れるだけで、場所は関係ないさ」

そんな事を言いながら、川岸の道で行われているライブ・ショーやダンスの賑わいを見て周り、九時頃には、上流の鎖橋の近くへ来ていた。

「さ、いよいよ始まるぞ・・・」と言いかけた伝一郎が、公園のと同じに、一粒の雨を感じ受けた。

すると、風までが、生暖かさを孕んで来た。

「チーミン、ヤバイ、橋の下に入ろう」

川沿いの街灯が消され、街の灯は空の星との境を消した。と、そのとたん花火が上がった。

花火の発射音が合図かのように、雨が降り出し、川上から風は吹き



荒れ始まった。

それが豪雨と強風の大嵐へと、まったく一瞬の内に天候が豹変した。橋の上で上げている花火は、止まらなかったが、風に煽られ、上に昇らず、横、いや前に流れて川面で散った。

雨は土砂降りになり、人々は橋の下へと駆け込んでいった。

橋の下では、誰もが開き直りの落ち着きがあつた。

超満員となった橋の下で、人々は嵐に吹き流される花火に、やり場のない歓声を、暴風雨と共鳴するように上げていた。

誰も雨具を持っているものは居なかった。

二人が、買い物袋をかぶると、周りに居た人々が真似るように、持っていた買い物袋をかぶりだした。

だが横殴りの雨は、橋の下にいる人々の薄着を容赦なく通し、誰もが濡れ鼠になっていった。

ついに花火は、予定の三十分を上げ続けた。

風は収まったものの、小雨はまだ降っていた。

たつぷりと花火の時間に合わせたような暴風雨は、嘘のように止んでしまった。

人々は橋の下から出始めた。

川沿いの道は、ゴミ箱になっていた。

伝一郎とテメアは、そこを、下流のエリザベート端に向って帰り始めると、歩行規制がされていた。

誘導員の向こうには、誰かが倒れている。

模擬店のテントが丸めた紙くずとなり、その骨は使い捨ての割り箸のようになつて、コンクリートの土手に叩き付けられていた。

集団自殺でもあったように、人が倒れている。

ゴミ箱の中でのうめき声と、虚脱と放心に押さえつけられて、座り込んでいる人々の居る川沿いの道は、通れないと誘導された。

石段を上り、上の道に出た。紙くずやペットボトルに混じつて、小枝の吹き溜まりがあちこちにある。

並木の大枝が折れて、道を遮っている。

パトカーのサイレン、救急車の音が川上からけたたましく聞こえてきた。

さらに歩行規制があり、道の反対側を進むように誘導された時、ふと上から土手下の道をのぞき見た。

そこに何人もの人が、折り重なるように倒れていた。

数人が救急処置をしている。

「デン、あの人達、ここから落ちたらしいよ」とテメアが言う、ことは、自分達がパンを食べ、ジュースを飲んだ、あの道の塀の事だった。

ドナウの川面は、黒々と流れていた。

倒木と、祭りに飾った電線で、感電の危険があるから、並木道を避けるように誘導している。

何度も、右に左に誘導された。

ドロの水溜りを越え、ビルに沿って歩いた。

ずぶ濡れのまま、難を避けるように、ビルに張り付いて立っている人の列が続く。

時折降る生暖かい小雨は、人々を一瞬緊張させた。

レスキュー、パトカーが救助に急ぐ。

観光バスに、異国の顔をしたずぶ濡れの客が乗り込んでいる。

ハンガリーの建国を記念するこの日も、多くの問題を残し、過ぎようとしていた。

そこに、ケミカル・ライトやラッパの玩具を売る子供が、ずぶ濡れた避難民のような通行人に、買ってくれとせがんでいた。

冷たいビールはどうか、と言って売る人が居る。

玩具に手を出す人も、ビールを買う人も居ない。

通行人は只、男は女を支え、親は子の手を引き、黙々と歩いていた。「デン、あの子達は皆ジプシーだよ」とテメアが堪りかねたように言った。「ビールを売っていた酒焼けした男も？」

「そうさ」

「遅しいじゃないか？」

「そんなんじゃないよ。人の気持ちを考えない、自分勝手なだけさ」  
「そうかな、彼らは、死と言うものを身近に感じて生きてるんじゃないかな？」

「だからって、皆が大変な思いをしている時でも、ああやって物を売りつけようと出来るわけ？」

「嵐には関係なく、今日という日が、彼らには必死なのかもしれないよ」「私、嫌い」

「ん、好きな人は居ないだろう、誰も、見向きもしていないんだから」

しかし、そうしなければならぬ、彼らの社会があるのだらうと、川北伝一郎は思った。

そして遙か昔、群馬県の軽井沢で、連合赤軍による、あさま山荘事件が起きた時、現場警察軍の気も知らず、何を思ったか焼き芋を売る人が居た事を思い出した。

伝一郎は、警察軍勝利の、その後を、思い出せなかった。

車道のどこかで、障害でもあるのか、数珠繋ぎに止まっている車のライトが、道の電飾板となって続いていた。

いつもなら、けたたましくクラクションを鳴らすハンガリー人も、諦めに似た顔で、鳴らす者は居ない。

店の看板が吹き飛ばされ、車道を塞いでいた。通りかかった、公園の木々が倒れている。

二人は、バイクやメルセデスで来なかったことに、胸をなで下ろし、ピクニックで、通り雨に会った様な顔で十一時半に、家に着いた。伝一郎が明かりを点け、テメアはパンツまで濡れた服を洗濯機に入れ、全裸のままテレビをつけ、その前に座り込んだ。

「何か、暖かい飲み物作るね」と伝一郎がキッチンから言った。

アールグレイの温かい紅茶を持って、テメアの側に行った。

昼の様子は報じていたが、まだ夜の嵐は流れていなかった。

画面がいきなり、臨時ニュースを流し始めた。

死者三人、怪我人五百数名。四つのボートが衝突し、二人が不明と、テレビから流れた。

三年前の思いが、現実になった気がした。

無論、花火の所為ではない。だが、なぜだ？

あの時、手を取る相手も無く、始めて見たドナウの花火は綺麗だった。

川岸に立って、花火の真下で見ていたが、その轟音と、花火の黒い燃えカスを顔に受け、閉口しながら、戦争を知っている人は、この轟音をどんな思いで聴いているんだろうと思った。

音のしない花火を懇願しているかもしれないと、伝一郎は思った。夏といえば花火、しかし見ている心は、戦火に喘いだ過去に苛まれているかも知れない。

見えない心が、見える形にならなければいいが、と思っていた事を思い出していた。

悲惨な花火大会が終わったその日から、何日も、同じ状況がテレビで流れたが、なぜ天候を予想できなかったか、なぜ花火は止まらなかったか、に焦点が絞られていった。

## 九、応答番組

花火は、コンピュータ操作のため、止めようが無かったという。

電源を切れればいいじゃないか。ところが、電源はバッテリーを使用し、嵐と共に花火師達は、避難してしまい、切断できなかったと伝えられた。

この事は、聞く者の同情を誘い、さしたる問題にはならなかった。が、天気予報の方は、収まらなかった。

ヨーロッパの中央気象台は、ハンガリーに対し、花火大会の時間帯に、異常天候が予想されると、警告していたと伝えられたからだっ

た。だが、それを受け取っていないというのが、ハンガリー側の主張だ

った。

しかし、受信したコンピュータの削除の部分を調べた結果、受信していた事が分かった。

そのコンピュータを担当していた女性が事情聴取を受けた。

知りませんでした。

なぜ？

・・・職務時間が来たので、家に帰りました。

貴方の職務時間は、何時から、何時までですか？

あの日は、朝十一時から、五時まででした。

その時間帯なら、貴方は受信を見ているはじゃないですか？

・・・私は見ませんでした。

見なかったのですか、見落としたのですか？

・・・分かりません。

・・・どうしてですか？

・・・席に居なかったと思います。

何処に居ましたか？

たぶんトイレか・・・

席に戻った時に、受信を確認しなかったのですか？

・・・つまらない広告が入っていたことは覚えていますが、それを削除しました。

・・・ついでに、気象予報も・・・

いえ、それは分かりません。

全然見なかったのですか？

少しは見た気がしましたが、まさか、あんなに天気が良いのに、嵐が来るなどと、悪戯でしかないと思いました。

・・・中央气象台からのメッセージを、悪戯と判断したんですか？  
そんな事は有りません。

どうしてすぐ、上司に報告しなかったのですか、それが例え、悪戯だとしても・・・。

信じて貰えるとは、思えませんでした。

それは、貴方が判断することではないと、分からなかったのですか？  
あんな冗談めいた事くらい、私にも判断できます。

この取調べの中でも、強い自己弁護と、オトボケが演じられていた。  
ヨーロッパ中央気象台は、丁度伝一郎が、公園で雨粒を受けた同じ  
時間頃、警告を出していた。

ハンガリーの気象受信局は、大通りに面しており、その頃、外はて  
んやわんやのお祭り騒ぎに、通り雨の最中だった。

担当女性は、その騒ぎに気を取られ、自分だけが仕事をしていると  
言う愚痴を持って、ぼんやりと窓から外を眺めていたのだった。

一ト月後、こうした事が明かるみに出ると、職務怠慢ということで  
女性とその上司は解雇された。

国民は当たり前だと、怒りを語ったが、何かやりきれないものも残  
った。「チーミン、何だろね、二人が解雇されたわけだけど、何か  
解決したんだろうか？」

「知らないわよ、そんな事」

「地震、雷、火事親父って、知ってる？」

「一つ一つは知ってるけど、どうして続けて言うの、分からないよ」

「ハハ、そうか、これはね、自然の驚異の順序なんだ」

「じゃ、大雨や大風じゃなく、地震が一番怖いわけ？」

「雨や風で壊れても、いつか元に戻るじゃない、でも地震が来れば、  
元には戻らないからね」

「でもデーン、ここに、地震はないよ」とテメアは、勝ち誇ったよう  
に言った。

日本では、日に三・四回の体感地震があるといわれ、無体感の地震  
を合わせると、四・五十回は記録されると、地震観測所は言ってい  
る。

そこへ行くと確かに、伝一郎もかれこれ五年にはなるつかというヨ  
ーロッパ生活の中で、地震は過去の思い出でしかなかった。

気象予報の中でも、地震は一番予想しにくい自然現象だという。雨、風、竜巻などの現象は、地球の表面で起こるが、地震は、見えない地下での現象だからかもしれない。

何億光年という宇宙の彼方に、視野を広げる事が出来ても、自分達の住む地球の中には、なかなか目が届かないで居る。

それは多分、地中のマグマに入って、溶解しない物質が無いからだろうと、伝一郎は思った。

宇宙がどんなに寒くとも、絶対温度といわれるマイナス二百七十三、一五度以下になることは無い。

絶対温度に耐える耐寒物質は有るが、太陽という星の灼熱に耐える耐熱物資はまだ開発されてはいないようだ。

「ね、チーミン、チーミンは太陽が好きだって言ってたよね」

「そっだよ、暖かくて、大好き」

「雲がかかったら、どうする？」

「平気、雲の向こうでは、やっぱり輝いてるから」

「その太陽の中に、UFOの基地があるんじゃないかなって・・・」

「・・・バカじゃないの？」とあっさりチーミンは伝一郎を笑った。

「ああ、あ、さ、寝て夢でも見よつと、おいで」

「・・・職務怠慢はいけない。予報を無視して、勝手に思い込むなんて、自惚れだよ。付け上がって、だからハンガリー人、嫌い」と  
テメアは、伝一郎の胸に顔を埋めながら、つぶやいた。

川北伝一郎の脳裏を、何かがブン、と走り抜けると、妙に意識が冴えていった。

テメアを抱く腕に力が入り、低い天井の薄明かりに目を向けた。

共通の敵を持ったもの同士は、仲良くするというが、テメアはハンガリー人嫌いの反動で、自分は犯罪家族からの逃避の反動で、同じ方向を向いているだけではないかと思えてきた。

もしそっだとすれば、反動する過去を、個々が何かの拍子に昇華した時、二人はどうなるのだろう。

テメアが、ハンガリー人を愛す事が出来るようになったら、それが

例え金を目的としながらも、現実となつたなら、テメアは離れて行くのだろうか、年令の差や、経済力を合わせ見ても、その可能性はかなり大きいと伝一郎は思った。

そして、駆け足でやってきた秋風に、肌刺す冷たさが混じる頃、とにかく、テメアが何時出て行ったとしても、この胸に戻りたくなるネストに、自分になることだと腹をくくった。

これは二人の出会いの時に言った言葉ではなかったか、と思い出した。

クリスマスが近づく頃、テメアはパーティーが忙しくなっていた。「明日から一泊二日で、コンパニオンの仕事が入って、他の町へ行くから、帰れないけど、いいかいデン」

「へえ、コンパニオンか、泊り込みとなれば、ギャラもいいのかい？」

「十万フォリント・・・」「じゅ、十万フォリント・・・マジでか？」

「そんなの、当たり前じゃない」

こうした事が、ほぼ二日おき位に、正月明けまで続いた。

「デン、私、もっとお金を稼ぎたい・・・」

「・・・んん、分かるけど、どうするんだい？」

「ランスルって国会議員が居るの、その人、私にビジネスを教えるから、うんと金を稼げって、昼は忙しいから、夜しか教えられないだから・・・」

「・・・だから・・・？」「しばらくランスルと暮らし、講義を聴きたい・・・」

「・・・ここを出て、その男の所へ行く、ということか？」  
テメアは下を向いたまま、頷いた。

「でも私は、デンを捨てる気はないよ。デンの所には昼、仕事の合間に、必ず毎日来るから・・・」

伝一郎は、つい一ト月前に思い、覚悟をした事への試練の時だと思つた。「・・・そういうことなら、仕方ない気もする。賛成は出来



ないが、犬や猫じゃないから、まさかに首に鎖を付けて、繋いで置くわけにもいかない。ましてやチーミンの人生は、チーミンが決めて、やることだから……」

「……私のこと、嫌いになったの？」

「それは絶対じゃない、只、ネストでありたいだけ」

「……ネスト……」

「覚えているかい？」

「フフ、見かけはオンボロでも、デンは私のネスト」と言った翌日、テメアはネストを出て行った。

## 十、二度目の正直

一人になった川北伝一郎は、絵筆を整え、画材を整理したが、画用紙は白いままだった。

テメアは毎日、伝一郎に顔を見せに来た。

伝一郎は、嫌味の一つも言いたい気はしたが、テメアの優しい心根にかえって苦しい日々が続いた。

溜息混じりに、強い酒を飲んで十日も続いた頃、伝一郎は酒に逃げている自分を恥じてきた。

暫く会っていない、絵描き仲間の正春を思い出し、電話を掛けた。

「近くに中華屋があるけど、知ってる？」

（ああ、知ってます、じゃ後で）

人なつこい童顔の残る正春は、今年で三十二歳になっていた。

川北伝一郎が、バチヨベラ通りから、電車通りに出、中華屋の前に来た時、後ろから正春の声がした。

「おお、久しぶり、元気に頑張っていたか？」

「何とか、やっていますが、納得できるものが出来なくて……」

「そうか、ま、中でゆっくり話そうか」

「貧乏人が二人じゃ、メニューの値段ばかり気になるな」

「あ、今日は心配しないでください」

「あれ、どうしたんだい、売れたのか？」

「いえ、バイトやって、昨日、金が入ったんです」

「どんなことやってる？」

「お土産屋の店員です」

「いそがしいか？」

「夏はいいですが、今はチヨボチヨボです」

「で、何飲む、ここね、ワインがどれでも二千フォリントなんだよ」  
「へえ、じゃ、強い頼みでしょうか？」

正春が、アルコール度数の高い赤ワインを、選んで注文した。

「デンさん、その後彼女どうですか、うまく行ってますか？」

「・・・うまく・・・か、行ってるのかどうなのか、よく分からんよ」

「っていうと・・・」

「別の男のそこへ行ったからな」

「え、別れたんですか？」

「それが、そうでもないから、余計分からんよ。正春の方はどうだい、その後、相変わらず、とつかえひつかえ、やってるのか？」

「と、言うか、男って・・・いや女もそうかもしれないですが、何をやっててもモテる時って、あるんですかね？」

言っている所にワインが来て、栓が抜かれた。

「オギヤーと生まれて、死ぬまでに、一回くらい粹な計らいの思し召しがあってもいいじゃないか」

「でも、でもですよ、前の男が大きかったら、恥ずかしいじゃないですか」

「処女を破るのは、ひと突きだが、自分に合うまで待つのも、ひと月だよ」

「たった？」

「たったって、ここが大事なんだよ」

「どうしてですか？」

「女は、そんな事は百も承知居る。だから気にしないが、この一ト

月の間に、女は男のハートを、穴が開くほど、よく見ているんだ」

「ああ・・・」と正春は、なんとも情けない溜息をついた。

「なんだ、思い当たる事でもあるか？」

「・・・どうすればいいですかね？」

「自分のしたいことより先に、女の希望を叶えてやる事じゃないかな」

「来る者拒まずで、やりますけど、嫌な女だっているじゃないですか」

「そりゃあるさ、俺が良いと言っても、お前には厭かも知れないんだから」

「経験から・・・ですか？」

「まあな」

そんな話をしていながら、ワインを二本も空けていた。

昼の暇な時間ということもあつてか、つまみも取らずに、飲んでいることに、店は嫌な顔一つしなかった。

正春は、会えば女の話をするが、絵の話をする事はなかった。

テメアは、やはりというべきか、二タ月前後で、伝一郎の元に帰ってきた。

「レッスンは終わったの？」と川北伝一郎は何気に言った。

「あいつ、嘘つきだから嫌いになった。小さいし・・・」

「嘘つきか・・・で、何をやっている国会議員なんだい？」

「知らないけど、議事堂にはよく行つてゐるみたい」

「ふーん、何党で、党員は何人なの？」

「ホームページで見たんだけど、三人」

「ホームページがあるという事は、一応議員なんだ。それにしても三人じゃ、ゴミ党じゃないか。チーミンにビジネスを教える前に、党員を増やす事だよ、その男。党員を増やす能力もない人間だから、肩書きで女をたらしこむんだ。ま、肩書きがあれば、スキャンダルは怖いだろうから、トラブルにはならない。後は知らん顔をしてい

ればいいさ。金ズルに成るかもしれないしね」

テメアの生活は、カラオケの頃と、少しも変わらないまま、続いていたのだった。

寝物語に、何時、誰と何処で、どんな事をして来たか言いながら、仕舞には、全部冗談だと言って笑うテメアが、そこにあった。

何の脈略も無く、伝一郎の脳裏に、地中のマグマと太陽が浮かんた。寒さに限度はあっても、暖かさには限度が無い。

太陽系九つの惑星間のガウスと同じように、そのバランスが、テメアとの間にあるのかもしれない等と、自己弁護のような思いに落ちていき、心の奥に在るガウスのS極とN極はいつもクルクル回って、相手がS極になり、自分がN極になった時、引き付けあい、SS極とNN極の時は反発し合い、ささやかな事で口論したり喧嘩をするのかもしれない。

それでも、容積が違いすぎると、いくらSNが引き合ったとしても、やがては受け入れる事が出来なくなるかもしれない。

刀と鞘が、それぞれ立派でも、反りが合わなければ収まらない。

容積の違いも、同じように入れ物と入る物が違えば、隙間が出来るのではないか、それを人生の味とでも言うのだろうか。

いや、ぴつたりと収まった味なら美味かろうが………。

それが冗談でも、現実であっても、テメアの背をさすりながら、抱きしめる事の出来ている自分を川北伝一郎は発見し、あんだ誰、と聞かれたなら、髪結いの亭主などという格好いいものじゃなく、やはりヒモか、と自嘲も浮かんだ。

数日後、いつもより早く、テメアは帰ってきた。

いつもの、デーンという声もなくどこか沈んだ感じでテレビの前に座った。

川北伝一郎はいつものように、何気にテメアの背をさするようにしながら、彼女の沈んでいる様子を探っていた。

今度は本物かもしれないと、伝一郎に予感が走った。

「名前、なんていうの？」と少し先回りして川北伝一郎が聞いた。  
「ガール」

名前を聞いて、川北伝一郎は、今度は、を省いて

「ランスルじゃないんだ」と言っつて俯いた。

「ちがう・・・・・・・・」

「なに人？」

「ハンガリー人」

川北伝一郎は、テーマから見えない横で、静かな溜息を吐いた。

「そうか・・・・・・・・」

と、川北伝一郎は、予定通りの旅に出る事になりそうだなと思うと、  
静かに顔を上げ、遠くを見るように目を細めた。

おわ

り

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3092f/>

---

小説「ガウス」

2010年10月31日04時06分発行